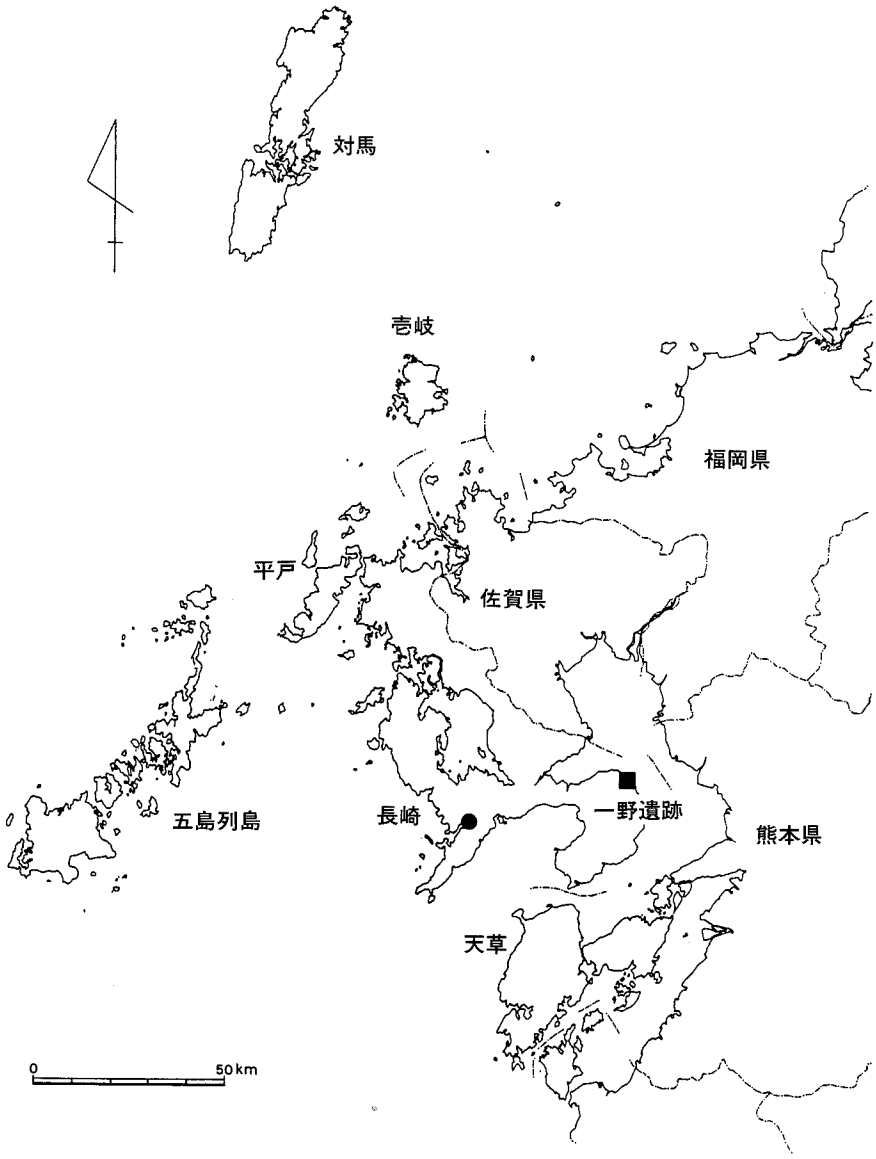
有明町文化財調査報告書　第11集

一野遺跡

1992
長崎県有明町教育委員会

有明町文化財調査報告書　第11集

一野遺跡



発刊にあたって

一野遺跡は，昭和34年国道251号線開発工事の際に発見され，39年・52年宅地造成に伴なう発掘調査によって，貴重な埋蔵物が検出されたところです。

この度，木村食品会社から倉庫建設の申請があり，県教育庁文化課高野晋司主事・浦田和彦主事の両先生にお願いして，発掘調査をしていただきましたところ，縄文中期から中世に及ぶ遺構や出土品が発見され，有明町の文化財の記述に新たな頁を加えることができました。

私たちはこの貴重な文化遺産を大切に継承し，町の宝として子孫に残していきたいと思います。

平成4年3月

有明町教育長　吉　田　忠　孝

例　　言

1　本書は，平成３年度の国庫補助事業として実施した，長崎県南高来郡有明町大三東一野に所在する一野遺跡内の工場建設に伴う緊急調査報告書である。

2　発掘調査は有明町教育委員会が事業主体となり，県教育委員会が調査を担当した。調査期間は平成３年８月５日～平成３年９月18日まで，調査面積は974m²である。

3　調査関係者は次のとおりである。

有明町教育委員会	教育長	吉田忠孝
	教育次長兼総務係長	前田久治
	総務係兼学校教育係	松本直喜
長崎県教育庁文化課	主任文化財保護主事	高野晋司
	文化財保護主事	浦田和彦

調査協力　国見高校考古学研究部

4　本書は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１・Ⅳ－２（住居址・土器）を高野が，その他は浦田が分担執筆した。

5　本書の編集は浦田による。

6　本調査関係の遺物は，現在長崎県教育庁文化課で保管しているが，報告書刊行後は町に返還の予定である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至るまで……1
Ⅱ　遺跡の地理的環境……1
Ⅲ　調査
　1　調査概要……3
　2　土層……4
Ⅳ　遺構と遺物……5
　1　砂遺構……5
　2　住居址……11
　3　石棺……19
　4　集石遺構……20
　5　Ⅱ層の遺物……21
　6　Ⅲ層の遺物……24
　7　Ⅳ層の遺物……25
Ⅴ　まとめ……34

挿　図　目　次

第1図　周辺遺跡地形図……2
第2図　調査区と周辺測量図……3
第3図　一野遺跡土層図（1／80）……4
第4図　一野遺跡遺構配置図（1／250）……5
第5図　砂遺構実測図……6
第6図　砂遺構出土土器1（1／3）……8
第7図　砂遺構出土土器2（1／3）……9
第8図　砂遺構出土石器……10
第9図　1号住居址実測図（1／50）……11
第10図　1号住居址出土土器実測図（1／4）……11
第11図　2号住居址実測図（1／50）と遺物出土状況……12
第12図　2号住居址出土土器実測図（1／4）……12
第13図　2号住居址出土土器実測図（1／4）……14
第14図　県内弥生時代住居址実測図（1／125）……16
第15図　2号住居址出土石器実測図（2／3）……18

第16図　２号住居址出土石器実測図（１／２）……19
第17図　石棺付近出土土器（１／３）……19
第18図　硬玉製装飾品（２／３）……19
第19図　石棺実測図（１／20）……20
第20図　集石遺構実測図（１／40）……21
第21図　II層出土土器（１／３）……22
第22図　II層出土石器……23
第23図　III層出土土器（１／３）……24
第24図　III層出土石器（２／３）……25
第25図　IV層出土土器１（１／３）……26
第26図　IV層出土土器２（１／３）……27
第27図　３号土壙実測図（１／20）……28
第28図　条痕文拓本（56）……28
第29図　IV層出土土器３（１／３）……29
第30図　円筒形条痕文土器出土遺跡……30
第31図　IV層出土石器１……32
第32図　IV層出土石器２（２／３）……33

表　目　次

第１表　県内弥生時代住居址計測表……15

図　版　目　次

図版１　遺構検出状況……37
図版２　出土石器１……38
図版３　出土石器２，砂遺構出土土器……39
図版４　住居址出土土器１……40
図版５　住居址出土土器２，II・III層出土土器……41
図版６　IV層出土土器１……42
図版７　IV層出土土器２……43
図版８　調査風景……44

I　調査に至るまで

昭和34年，国道251号線新設工事の際に弥生時代の甕棺と古墳時代の石室が発見されたのが一野遺跡として周知されたきっかけである。

その後，昭和38年の宅地造成に伴う発掘調査によって弥生時代の甕棺1基，箱式棺2基，土壙墓3基が検出され[註1]，また，昭和52年には農作業中に人骨が入った古墳時代の石室と思われる遺構が発見されている[註2]。

以上の遺構や遺物は比較的近接地からの出土であったが，当該地周辺の分布調査の結果では縄文土器から須恵器にいたる，時期的にかなり幅を持つ遺物がかなり広範囲に分布していることが分かった。一方，遺跡は国道が横切っているため各種の開発も多く，人知れず遺跡が壊滅していることが憂慮されたため，県では昭和52年広範囲にわたる周辺の地形測量を行なって遺跡の範囲を示し，関係各機関に対して改めて遺跡の周知方に務めることとした。

今回の発掘調査は，その結果事前に把握された遺跡地内の工場建設に伴う緊急調査として実施したものである。

II　遺跡の地理的環境

島原半島の北東部の一角を占める有明町は，雲仙火山群を構成する諸峯の一つである舞岳（702m）頂点とし，北側に放射状に展開しながら町域を拡げ，その裾部を有明海と接する。

地勢は，頂上部から標高450mラインまで一気に駈け下ったあと緩慢な傾斜に変化する。以下火山性山麓扇状地を形成しながらゆるやかに下降を続け，やがて先端部は有明海に没する。

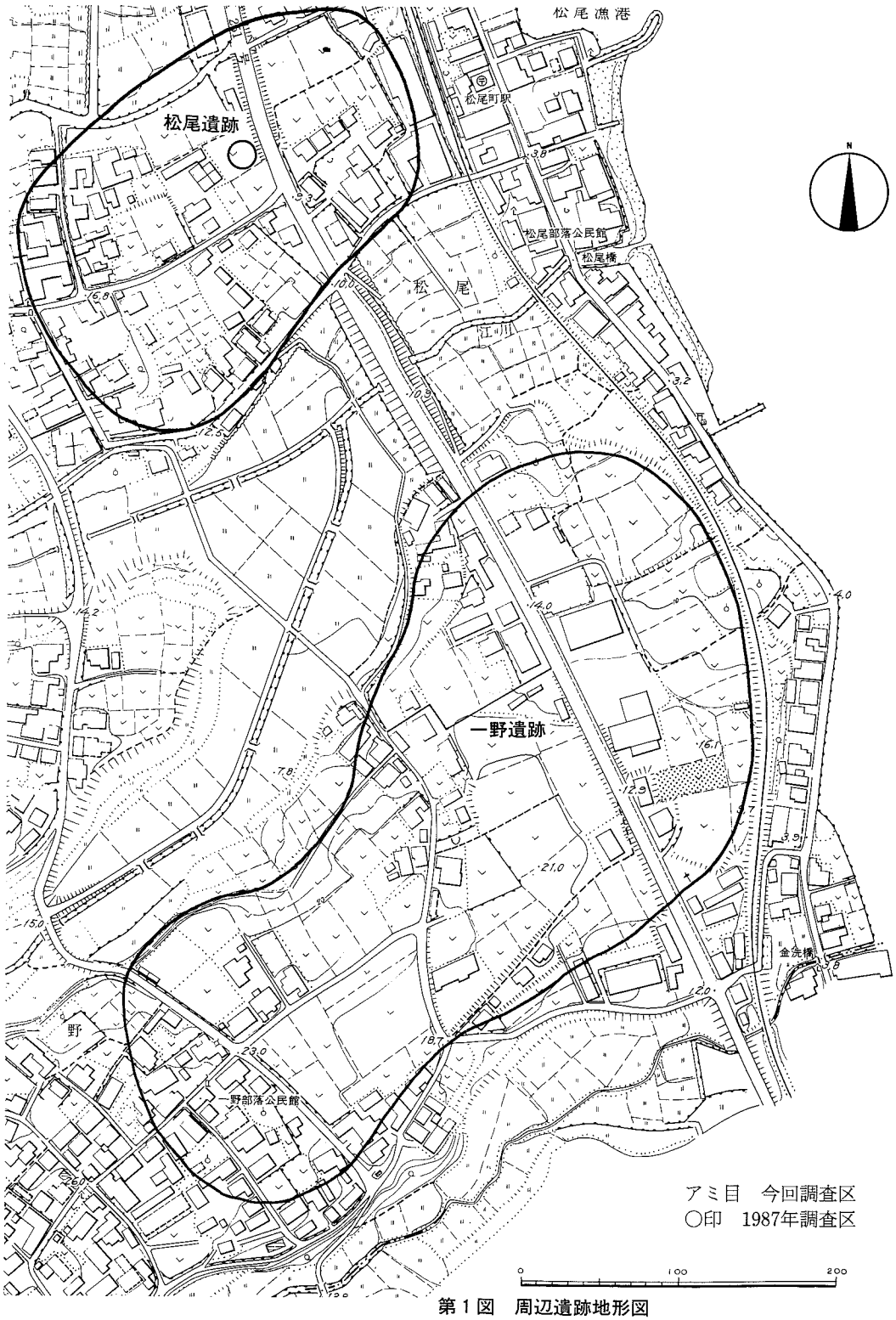
河川による解析もこの傾斜分岐点あたりから始まるが，流量・流域面積共に貧弱で豊かな扇状地を形成できず，現在でも水田は狭小にならざるを得ない。

一野遺跡は，先述舞岳から派生し有明海に向かって延びた尾根の先端部分，金洗川と江川とによって解析された洪積世段丘上に位置する。遺跡は国道によって分断されているが，先の両河川によって挟まれた現状畑地の段丘上，東西300m，南北650m程がその範囲と考えられる。

本遺跡から一つ北側の段丘上には，松尾遺跡が知られている。昭和53年宅地造成に伴って発掘調査が行なわれ，8世紀から9世紀にいたる律令時代の遺構や遺物が多く出土した[註3]。このように，尾根先端部の洪積世段丘上はこの地点に限らず縄文時代から古代に至るまで間断なく地域住民の主要な生活舞台として利用されてきたことが窺える。（第1図）

註1　古田正隆　「一野遺跡（南高杵郡有明町）」　長崎県有明町教育委員会　1964
註2　長崎県教育委員会　「一野遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第86集　1987
註3　長崎県教育委員会　「松尾遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第91集　1988

II　遺跡の地理的環境



第１図　周辺遺跡地形図

III 調　査

1 調査概要

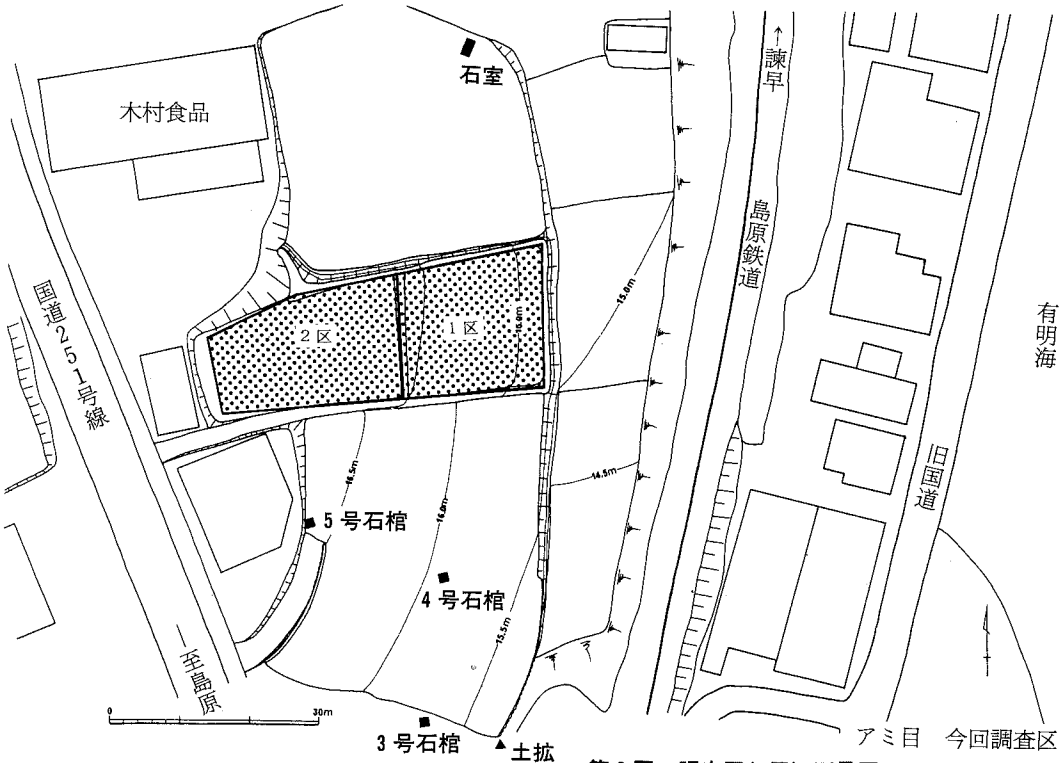
一野遺跡は南高杵郡有明町大三東（おおみさき）字一野に所在する。一野遺跡全体の面積は約20,000m²にも及ぶものと思われるが，今回の調査はその内工事にかかる974m²である。

当該地一帯は先述したように，昭和34年以来数回にわたって各種遺構や遺物が出土している今回調査が避けて通れなかった理由も，且つてこの隣接地に甕棺や石室が発見されていたのが原因である。（第2図）

工事予定区域は，有明海に面する海岸段丘上にあり，標高は16m前後のほぼ平坦地である。調査にあたってはここを2区にわけ，東側を1区，西側を2区と呼称して漸次掘り進めた。

なお，調査にあたって物心両面にわたって援助をいただいた木村食品と，酷暑の中熱心に応援いただいた県立国見高校考古学研究部の皆様に心から御礼を申しあげたい。

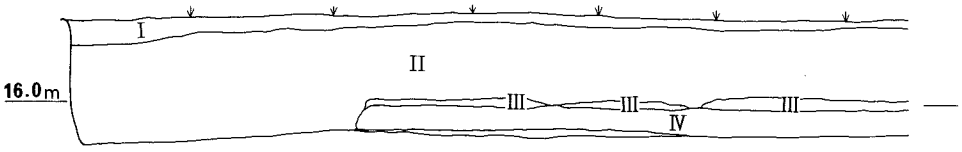
なお，現在も活発な活動を見せる雲仙普賢岳は本遺跡の南西約10kmにあり，頻繁に崩壊を繰り返す火砕硫は調査中の遺跡にも時折厄介な火山灰を降らせ，無駄な清掃を繰り返させる原因となった。また，調査作業員の中には避難を余儀なくされた方々も参加されていた。噴火はいまだ衰えない。鎮静化を祈ると共に心からお見舞いを申しあげたい。

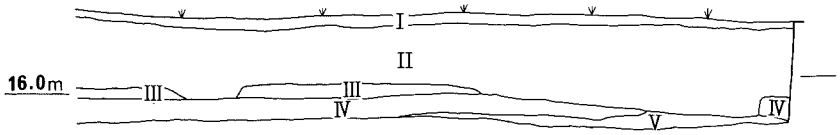


第2図　調査区と周辺測量図

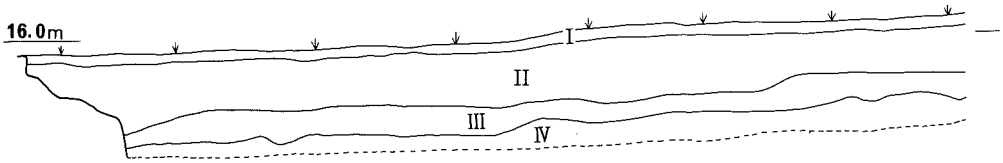
2　土層

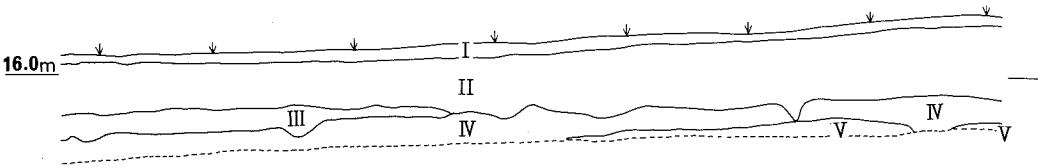
2区東壁　土層図(1/60)

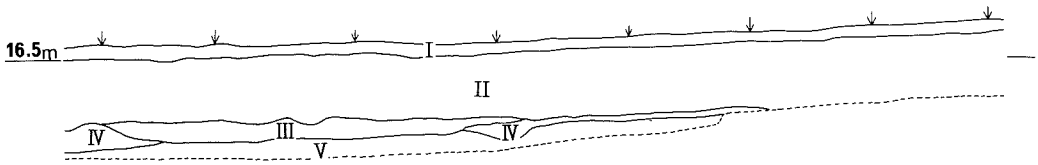


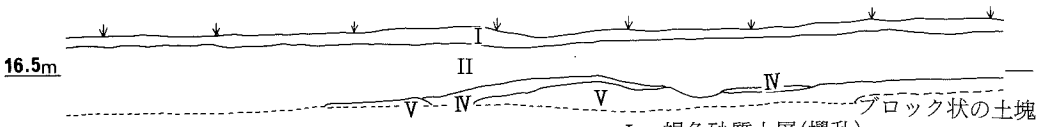


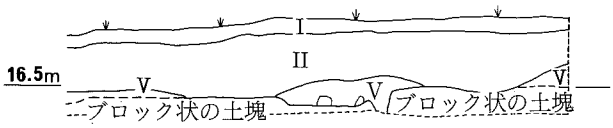
南壁土層図(1/60)











I　褐色砂質土層(攪乱)
II　暗褐色砂質土層(攪乱)
III　黒色砂質土層
IV　明褐色粘砂層
V　茶褐色粘砂層

0　2m

第3図　一野遺跡土層図(1/60)

基本的には，５層に分けられる。Ⅰ層は褐色砂質土層，Ⅱ層は暗褐色砂質土層で，このⅠ・Ⅱ層は畑の天地返しによる攪乱層であり，深度は1m前後である。Ⅲ層は黒色砂質土層で弥生時代から中世の遺物包含層であるが，やはり天地返しを受け，部分的にしか残存していない。Ⅳ層は明褐色粘砂層で縄文時代の遺物包含層である。Ⅴ層は茶褐色粘砂層で無遺物層であり，下部になると淡黄色の硬いブロック状の土塊を全面に含むようになる。（第３図）

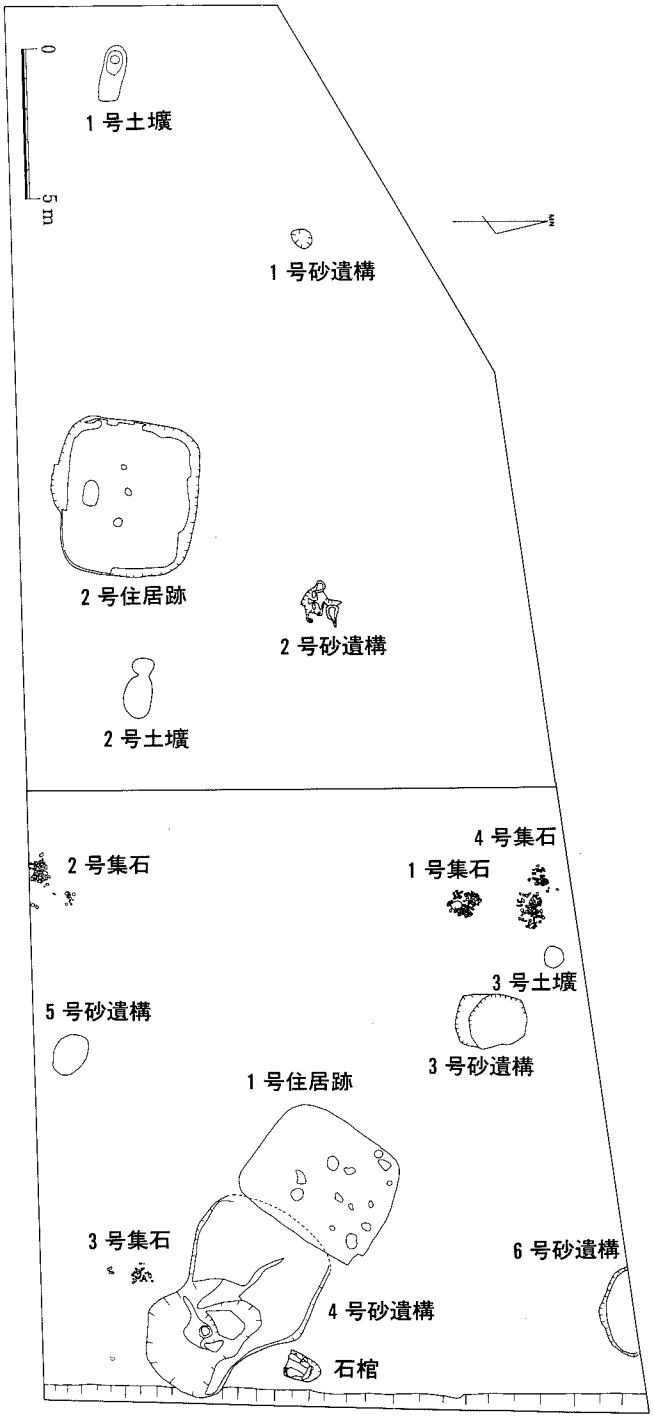
なお，Ⅴ層の下はオレンジ色の大三東ローム（約３万年前）が現われる。

Ⅳ　遺構と遺物

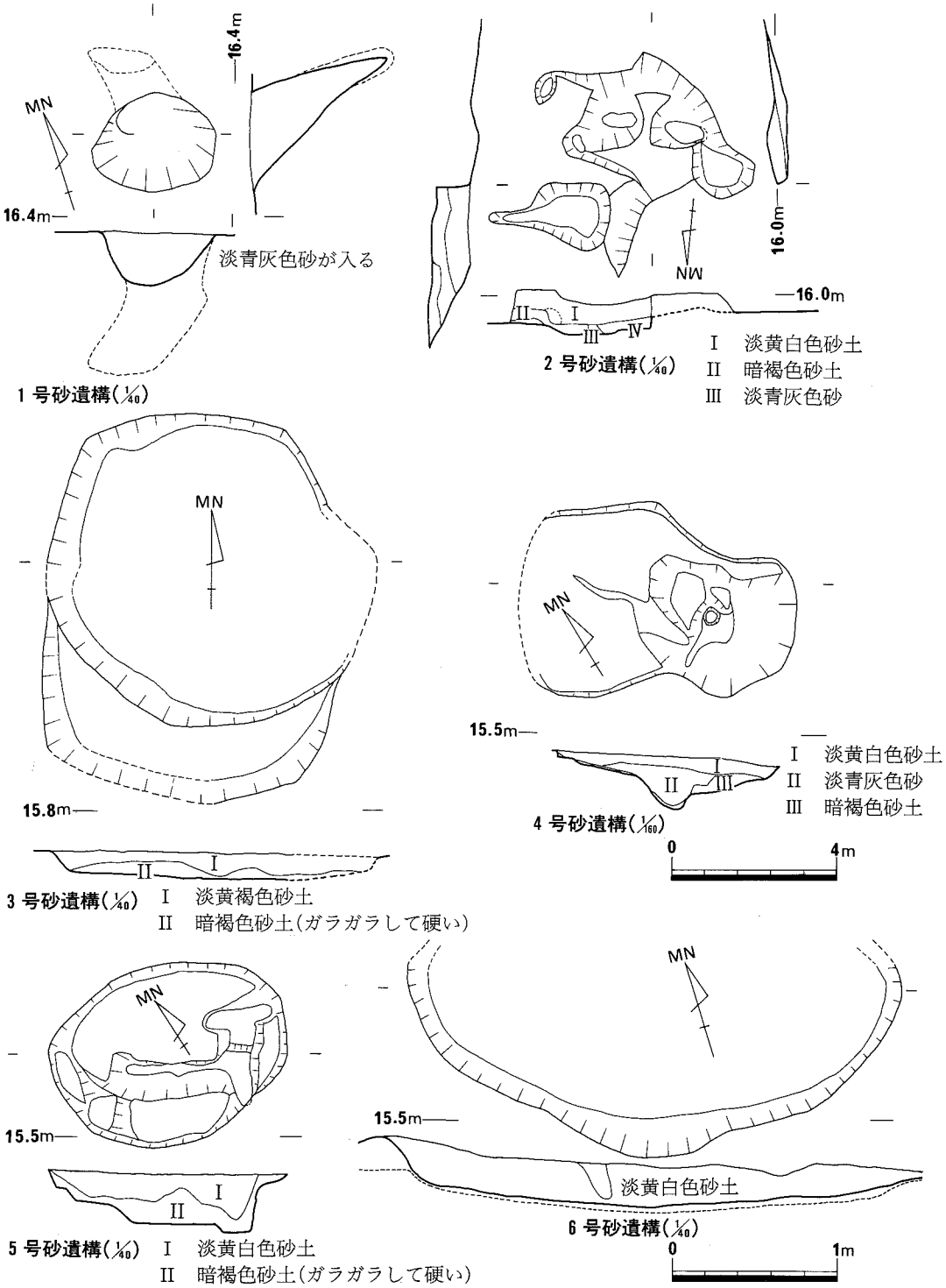
遺構は土壙が３基，砂の入った土壙状の遺構が６基，弥生時代の住居址が２軒，石棺が１基，集石遺構が４基検出された（第４図）。

１　砂遺構（第５図）

調査区全体より砂を充塡した不定形の土壙が，Ⅳ層上面から掘り込むかたちで６基検出された。規模は径が60cmから6mを，深さは20cmから1mを越えるものまで様々である。



第４図　一野遺跡遺構配置図（1/250）


16.4m
MN
16.4m
淡青灰色砂が入る
1 号砂遺構(1/40)
MN
16.0m
16.0m
II
I
III
IV
2 号砂遺構(1/40)
I　淡黄白色砂土
II　暗褐色砂土
III　淡青灰色砂
MN
15.8m
II
I
3 号砂遺構(1/40)
I　淡黄褐色砂土
II　暗褐色砂土(ガラガラして硬い)
MN
15.5m
I
II
III
4 号砂遺構(1/160)
I　淡黄白色砂土
II　淡青灰色砂
III　暗褐色砂土
0
4m
MN
15.5m
I
II
5 号砂遺構(1/40)
I　淡黄白色砂土
II　暗褐色砂土(ガラガラして硬い)
MN
15.5m
淡黄白色砂土
6 号砂遺構(1/40)
0
1m

第 5 図　砂遺構実測図

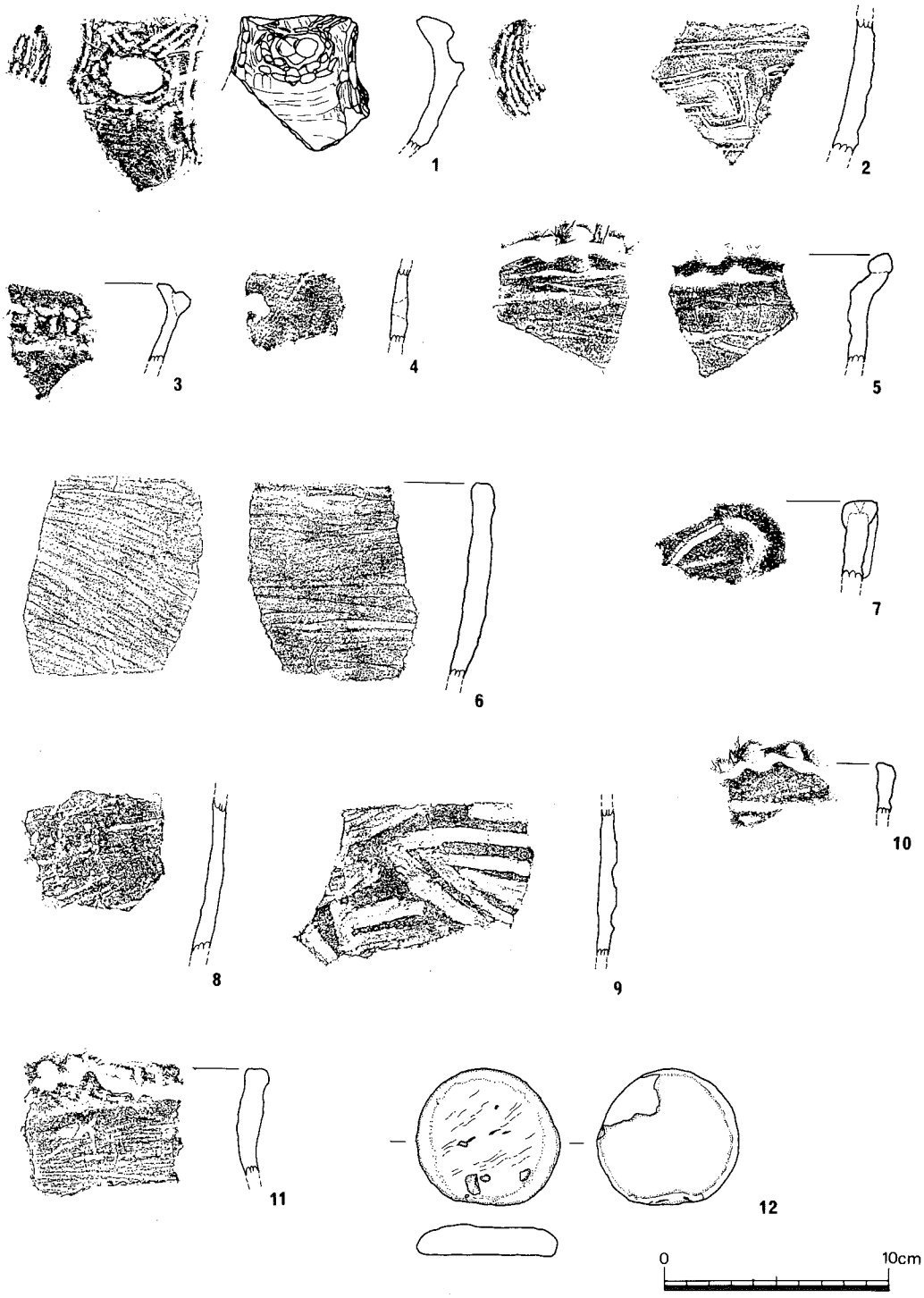
土壙内からは縄文時代中期の阿高系の土器を中心に縄文時代後期初頭と考えられる土器までまとまって出土した。少ないもので30点，多いもので250点程の出土量である。

出土土器（第6・7図）

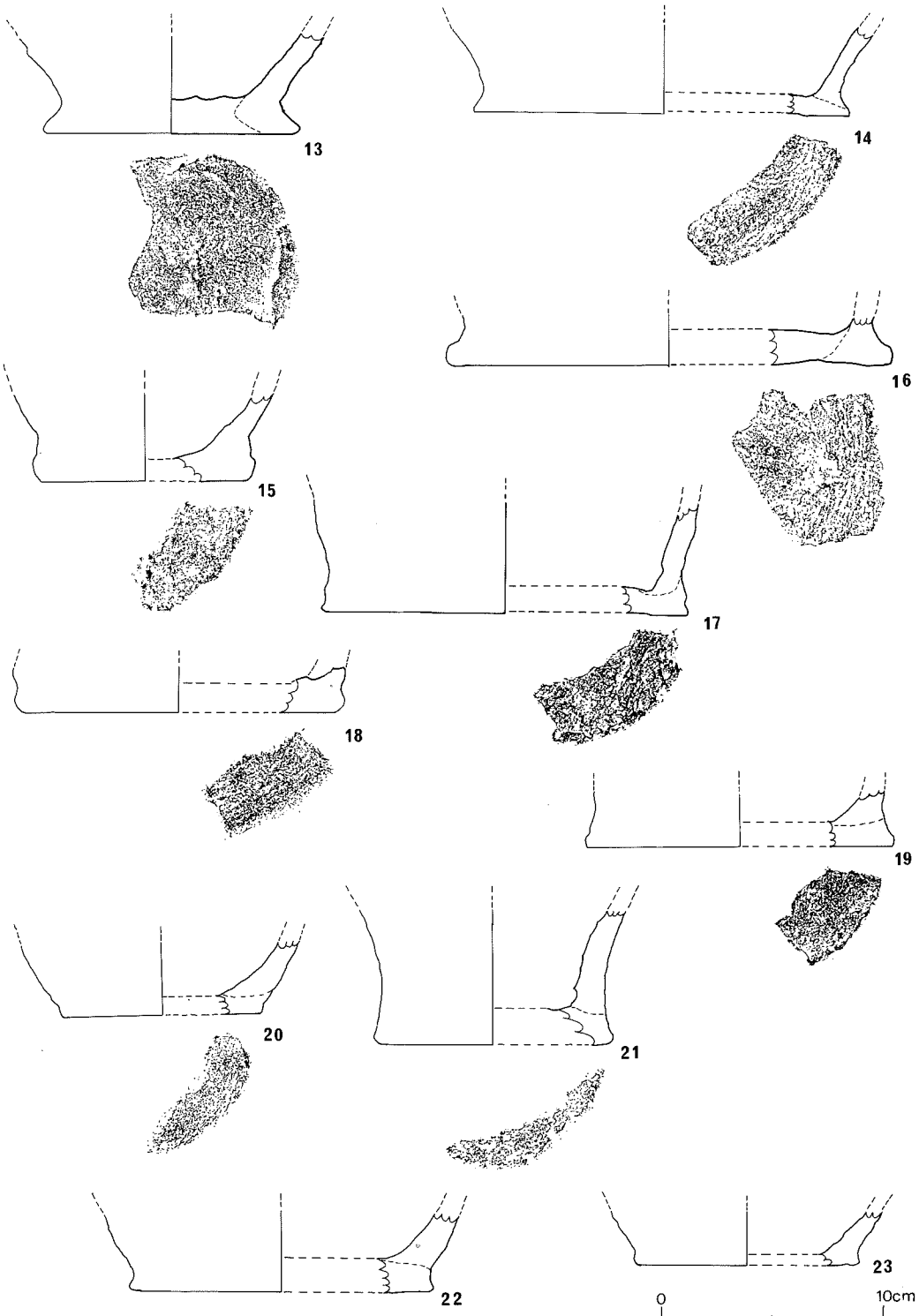
1～4は並木式系統の土器である。1は口縁の突起片で胎土には滑石粉を含み，明褐色を呈す。内面はヘラによる丁寧な調整を，外面・側面には直線と丸い刺突紋が施されている。焼成は良い。2は鉢の胴部片で外面に細い沈線による直線的紋様を施す。胎土には滑石粉を多く含む。焼成は良く，外面は黄褐色，内面は赤褐色を呈す。3は口縁部片で口縁端外面に突帯を付け，刻み目を施す。胎土に滑石粉を多く含み，焼成は良い。明灰褐色を呈す。4は鉢の胴部片で胎土に滑石粉を含み，赤褐色を呈す。補修孔を穿つ。5～11は阿高系の土器である。5・6とも内外面をヘラによる横方向の調整を行う。縄文時代後期に入るものと考えられる。7は口縁部片で内外縁に重ねるように丸く突帯を張り付けている。胎土に微細な砂粒を多く含み，焼成はやや甘い。黒褐色を呈す。8は鉢の胴部片で胎土に滑石粉を含み，赤褐色を呈す。9は鉢の胴部片で胎土に滑石粉を含み，外面に太く荒い沈線による紋様を描く。暗褐色を呈す。10は鉢の胴部片で口唇部に凸凹をつけている。暗褐色を呈し，ローリングを受け，摩耗が激しい。11は鉢の胴部片で口唇部に凸凹をつけている。内外面とも横方向のヘラによる調整を施す。12は土製円盤である。胎土に黒雲母を含み，淡赤褐色を呈す。ローリングを受け，全面に丸みを帯びる。13～23は底部片である。13は底の内面につぶしを，立ち上がり内面はヘラ削り，外面は横ナデを施す。黄褐色を呈し，胎土に微細な黒雲母や砂粒を多く含む。14はややあげ底ぎみで，胎土に滑石粉を多く含む。外面赤褐色，内面黄褐色を呈す。15は内外面とも底と胴部の繋ぎめ部分に横ナデを施す。胎土は砂粒をまばらに含み，外面明褐色，内面黄褐色を呈し，外面はやや風化している。16は内外面とも底と胴部の繋ぎめ部分に横ナデを施し，胎土に滑石粉砂粒を多く含み，暗赤褐色を呈す。17は内面の底と胴部の繋ぎめ部分に強く横ナデを，胴部外面には荒いヘラ削りを施す。胎土には微細な黒雲母・砂粒を多く含み，外面赤褐色，内面黄褐色を呈す。18は底部と胴部の接続部から割れている。胎土に砂粒を多く含み，赤褐色を呈す。19は胎土に微細な砂粒を多く含み，赤褐色を呈す。20は内外面とも底と胴部の繋ぎめ部分に横ナデを，胴部外面にヘラ削りを施す。胎土に微細な砂粒を多く含み，外面赤褐色，内面黄褐色を呈す。21は内面の底と胴部の繋ぎめ部分に強く横ナデを，胴部外面にはヘラによる縦方向のつぶしを施す。胎土に微細な黒雲母や砂粒を多く含み，外面赤褐色，内面黄褐色を呈す。22・23は風化が激しい。どちらも胎土に砂粒を含み，明褐色を呈す。

出土石器（第8図）

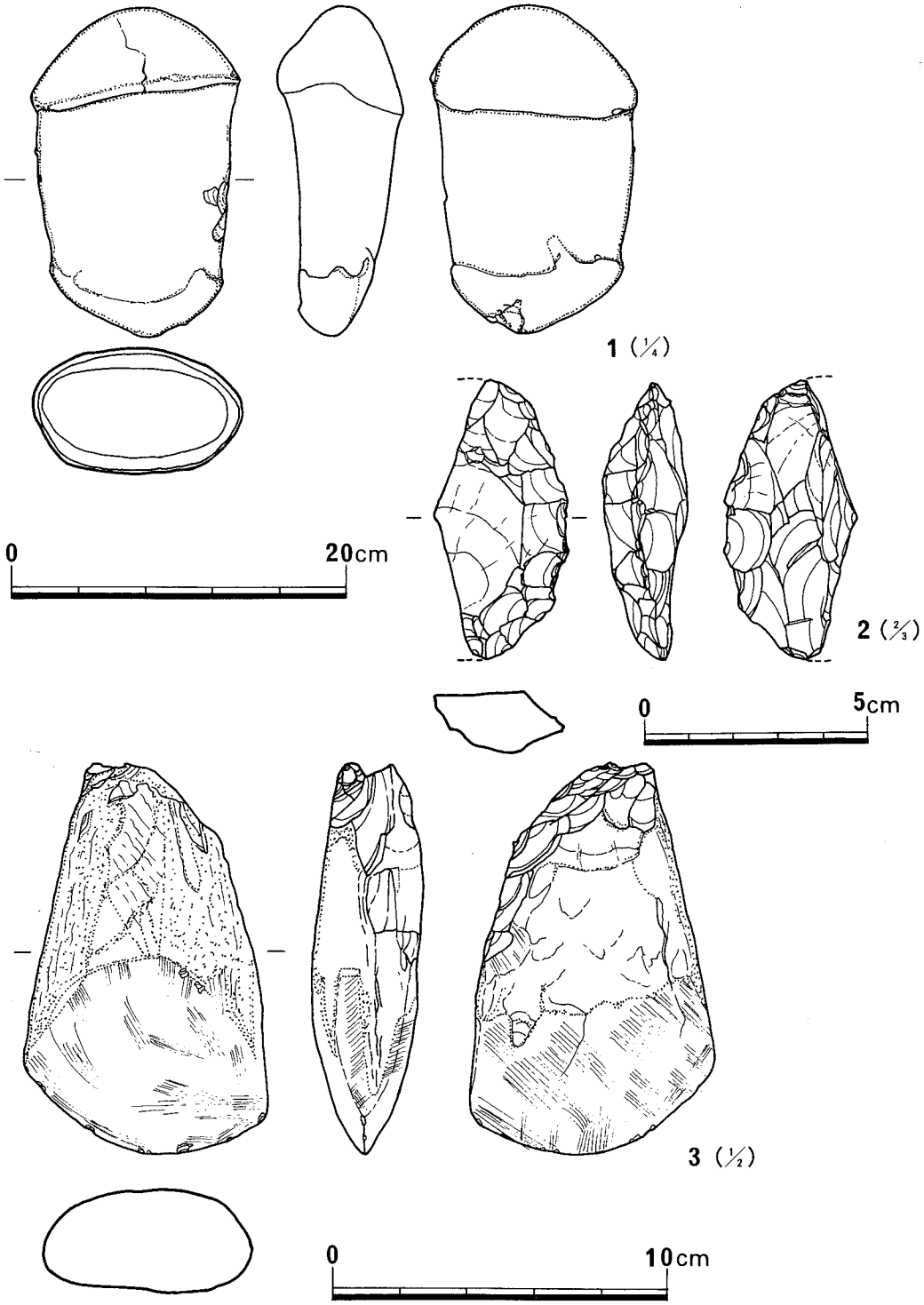
石器は4号遺構で20点程出土している他は2・3点の出土である。1はこの地域特有の黒雲母角閃石安山岩の自然石を利用した陽根状石器である。祭祀に使用されたものであろう。2は安山岩製のスクレイパーである。3は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部は丁寧に磨き上げ，着柄部には敲打痕が残る荒い磨きを施す。着柄部から斜めに折れている。



第６図　砂遺構出土土器１（⅓）

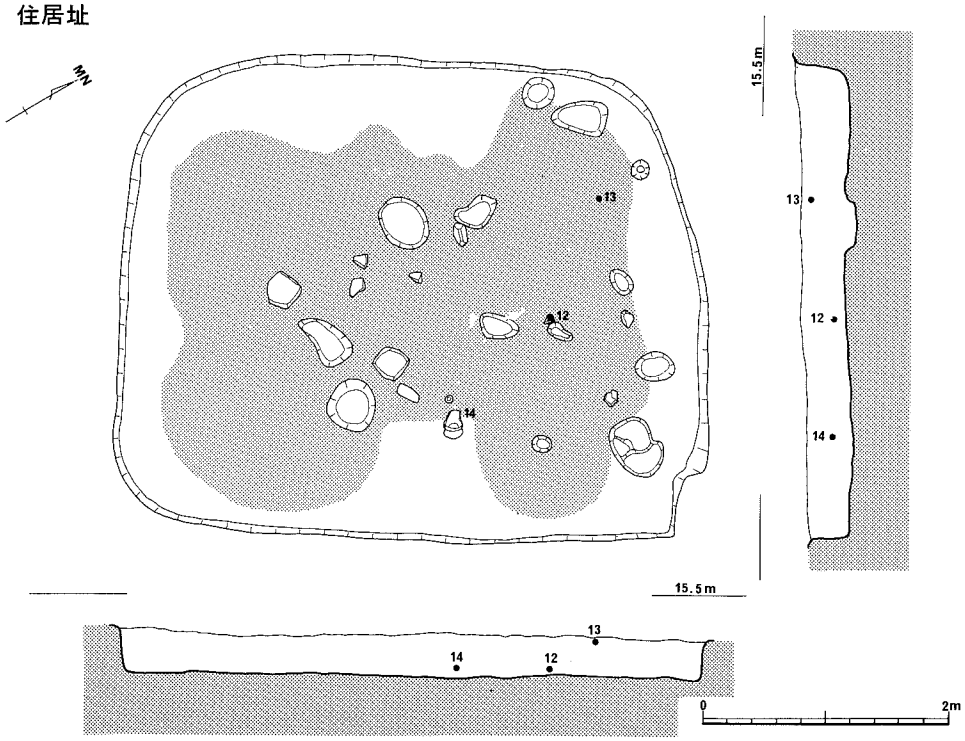


第７図　砂遺構出土土器２（⅓）

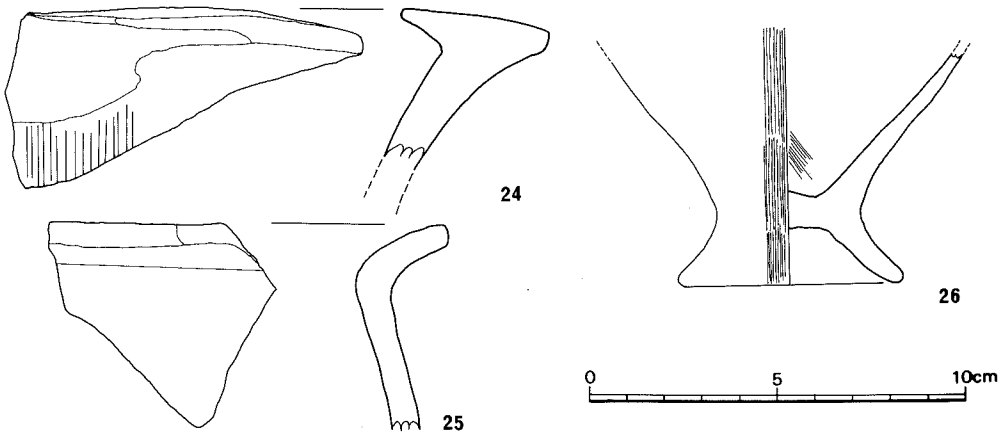


第８図　砂遺構出土石器

2　住居址



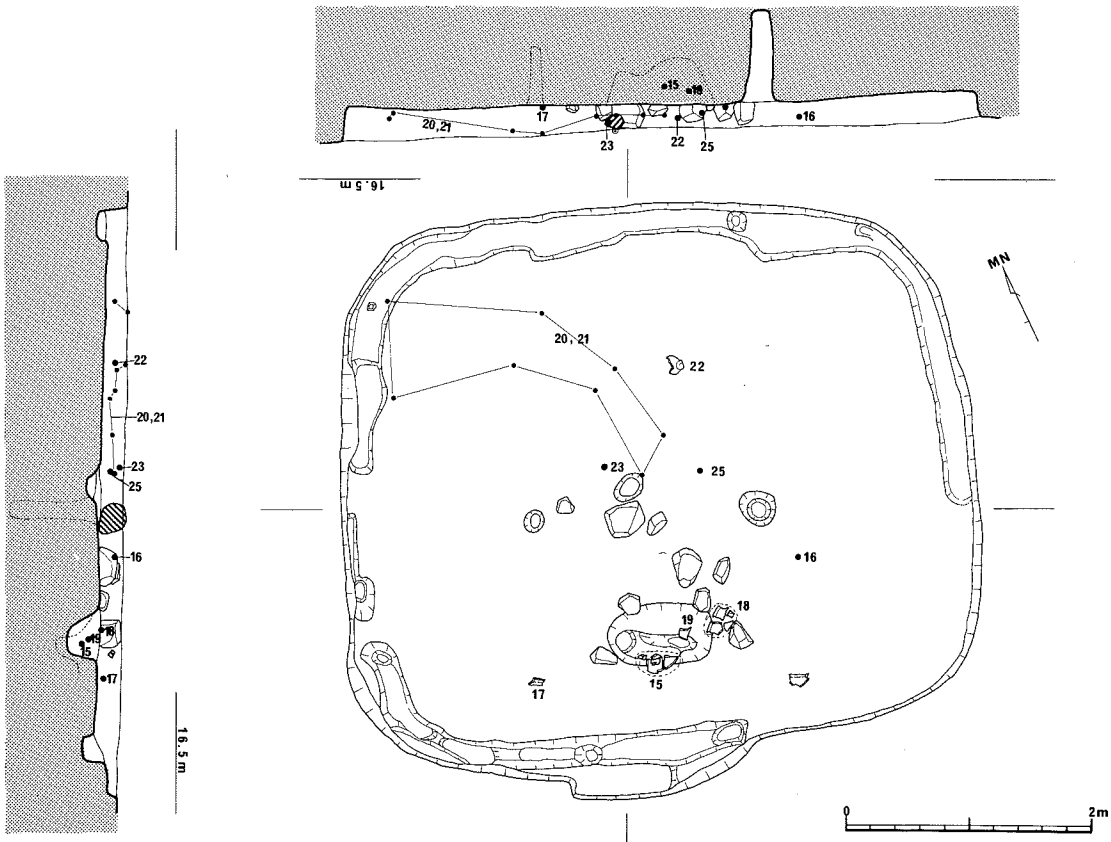
第９図　１号住居址実測図(1/50)



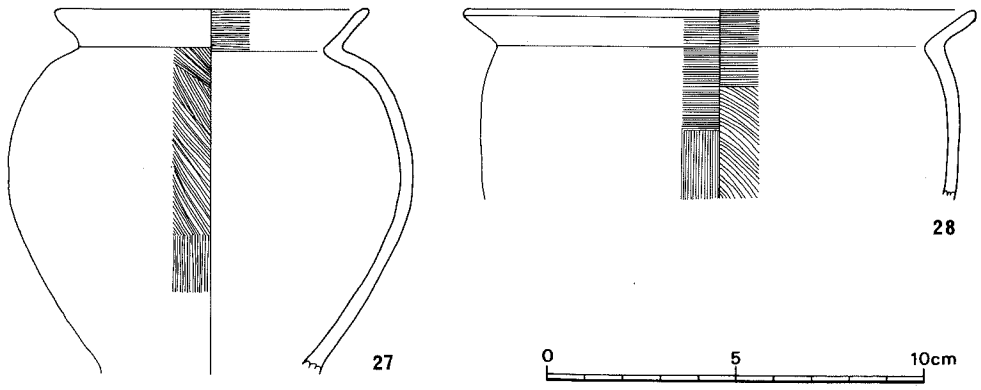
第10図　１号住居址出土土器実測図(1/4)

１号住居址（第９図）

１区の東側に位置する。4.8m×４ｍのいびつな隅丸の長方形をなし，略東西に主軸をおく。壁は40cm程立ち上がる。住居址内に大小のピットは多いが何れも不定形であり，明確な柱穴や炉跡と思われるものは確認出来ない。床面には厚さ４cm程の貼床が見られる。



第11図　2号住居址実測図(1/50)と遺物出土状況



第12図　2号住居址出土土器実測図(1/4)

1号住居址出土土器（第10図）

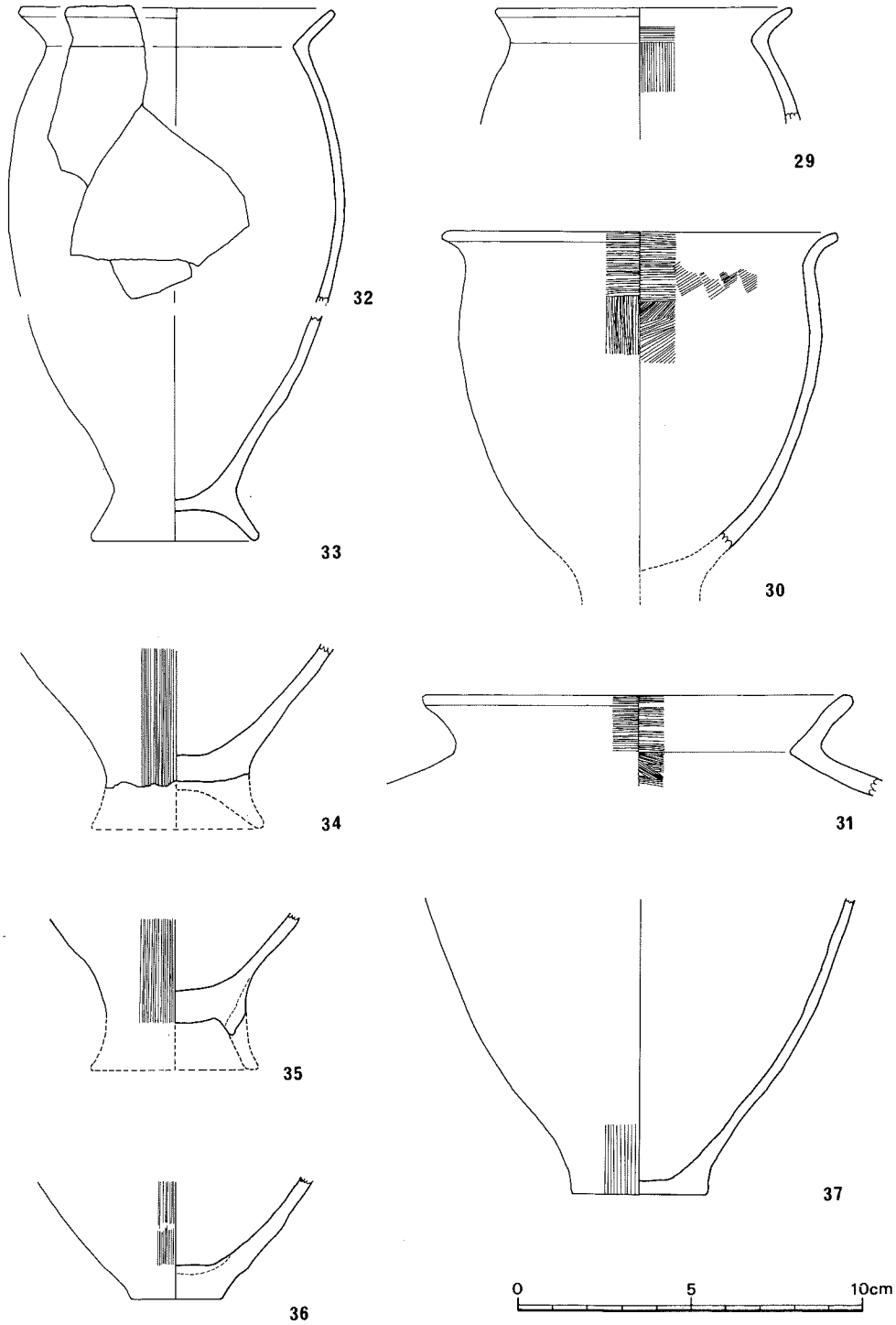
1号住居址からは20点ほどの土器片が出土したがその殆どが細片である。以下図示可能な資料について説明をしておく。**24**は鋤先状をなす壺口縁部である。一部を欠損する。明黄褐色をなし，胎土に金雲母を含む。焼成は良い。内頸部から口縁平旦部にかけては横方向のヘラナデ調整を行ない，外頸部には一部ハケ目調整を施す。本来は丹塗りであったらしく，口唇部下に丹の一部が残っている。北九州系の資料と思われ，色調・胎土共に異質である。他地域からの搬入品であろう。**25**は甕口縁部である。口縁がゆるやかに外反する。灰白色を呈し胎土に雲母を含む。焼成は甘くやや軟質である。口縁下にハケ目痕がかすかに残る。**26**は台付甕の底部である。器壁は1cm程の厚みを持つ。底径は12cmで大きく外反しながら胴部に至る。内外面ともハケ目調整を行なう。明褐色を呈し，胎土に石英粒と雲母を含む。焼成は良好である。器壁外側には二次焼成時のススが付着し，台部内側には砂が付着する。これらの資料は弥生後期前葉に比定出来ることから1号住居址は当該期の遺構と思われる。

2号住居址（第11図）

2区南側に位置する。5.2×4.6mでやや東西が長い隅丸方形をなす。壁の高さは20cm程で内側には南東の隅を除き，深さ10cm程の溝を巡らす。主要な柱穴は2個で，1.7mの間隔を持つ。中央部には不規則に礫が配され，南側には長さ80cm×40cm，深さ40cmの楕円形土壙が掘られている。床面は特に固く締まった状態ではない。

2号住居址出土土器（第12図～13図）

2号住居址からは土器片・石器片合わせて170点程の遺物が出土したが，図示できるの以下の資料である。遺物は床面直上のものと土壙内のものそして覆土内のものとがある。**27**は土壙内から出土した。台付の甕か鉢の資料であろう。口径は16.5cmで，径の最大幅は胴部上半部にあり21.5cmを計る。口縁は「く」の字形で口縁内部の屈曲部は丸みを帯びる。器壁は内外共にハケ目調整を行なう。色調は淡黄色で胎土に少量の角閃石を含む。焼成は良好である。**28**は台付甕口縁部である。床面からやや浮いた状況で出土した。口径は27.3cmで口縁は「く」の字形を呈し，内側屈曲部にやや稜がつく。口唇部は薄く丸みを持つ。器壁の内外の上半部は横方向にキメが細かく，下半部は縦から斜方向に荒いハケ目調整を行なう。胎土は精選されており角閃石と雲母を少量含む。**29**も甕口縁部である。口縁は「く」の字形にゆるやかに外反する。器壁外面には荒いハケ目調整を施す。灰白色で胎土に角閃石と雲母を含む。焼成はやや甘く軟質である。**30**も台付甕である。床面直上出土である。底部を欠損するが器形は十分に復元出来る。口縁部に最大径があり23cmを計る。口縁ぱゆるやかに外反し，丸みを帯びて胴部にいたる。器壁は内外面共にハケ目調整をおこなうが，器表面が一部剝落している。なお内壁には幅1.5cm程のハケ目圧痕が残っている。にぶい黄橙色で胎土には角閃石と雲母を含む。焼成は良好である。



第13図　2号住居址出土土器実測図(1/4)

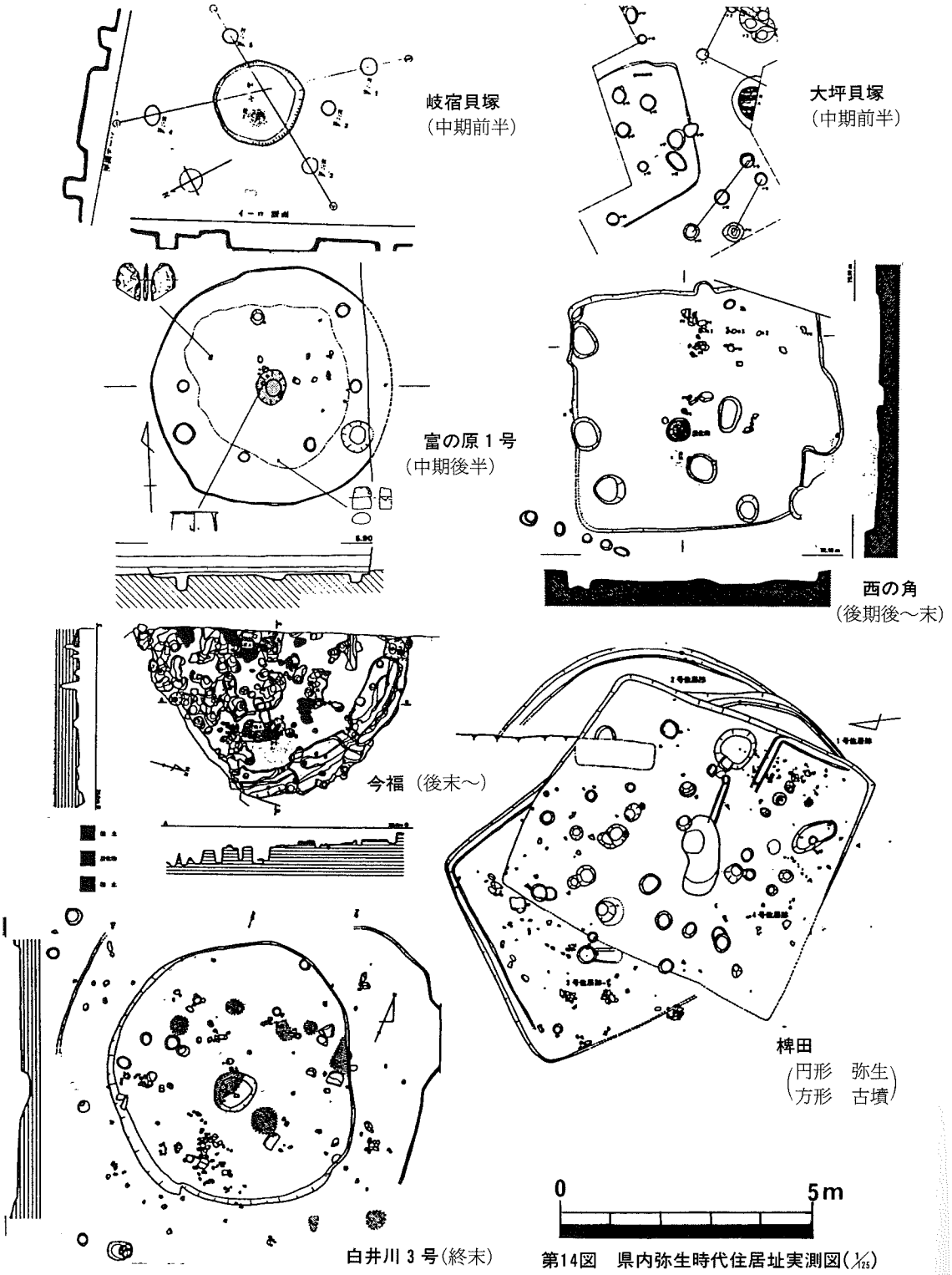
31は大型の土器で甕棺の可能性もある。土壙内から出土している。口径は25cmで，鋭く屈曲した頸部から大きく外反して肩部を作る。器壁は１cmの厚みを持ち，内外面共に幅６mmを単位とするハケ目による横ナデ調整を行なう。色調は鈍い橙色で，胎土に石英，金雲母の他漆黒色の黒曜石の剝片が1個含まれている。成形時での混入であろう。焼成は堅緻である。**32**と**33**は同一固体と思われる。但し，一括資料ではなく，３ｍ程の間に細かく割れた状態で出土している。**32**は台付甕の口縁と胴部である。復元口径は18cm程で口縁は「く」の字形に鋭く屈曲しており，内部には稜がつく。薄手の作りで色調はにぶい橙色を呈し，胎土に角閃石と雲母を含む。器表面頸部にハケ目痕が観察される他全体的にススが付着する。**33**は台付甕底部で底径は10cmである。色調，焼成，胎土などの諸特長は**32**と同一である。**32**と**33**を図上で復元すると，高さは31cm程の胴長のタイプとなる。**34**は台付甕底部で台部を欠損している。しかし横に裁断したような不自然な割れと剝落が見られるなど，意識的に割った可能性がある。器表面は縦方向のハケ目調整を行なう。赤褐色で胎土に角閃石と雲母を含む。焼成は良好である。台部内側には**26**と同じく砂が付着する。覆土内出土資料である。**35**も台付甕底部である。同じく覆土内出土で床面から少し浮いた状態で出土した。**34**と同じく不自然な割れ方をしている。明赤褐色で胎土に角閃石と雲母を含み，焼成は甘い。器表面は一部に剝落が見られるが縦方向のハケ目痕が観察される。**36**は壺の底部であろう。底径５cmで外側に急速にふくらみながら胴部を作り出す。黄灰色で焼成は甘く，胎土に角閃石と雲母を含む**37**は甕底部である。台付でないタイプはこの資料を含めて極めて少ない。底径は８cmで，器壁は６mmと薄く仕上げる。調整痕は不明瞭で，ススが付着する。色調は暗茶褐色で胎土に石英と雲母を含む。焼成は良好である。他地域からの搬入品と思われる。

以上が２号住居址内出土の土器である。類似資料は森山町西ノ角遺跡[註5]，北有馬町今福遺跡[註4]で多く出土しており，弥生時代後期前葉に編年されている。

本県においては，弥生時代の住居址自体があまり発見されていない。本遺跡例を加えこれまで報告された遺跡としては以下の９遺跡14例が知られるのみである。表にしてまとめておく。

第１表　県内弥生時代住居址計測表

	遺跡名	所在地	平面形	法量	主柱穴	特長	出土遺物	時期	文献
1	四反田	佐世保市下本山町	円形	径 3m 5m	2 4	15基礎確認，中央に炉址		前期後半	3
2	岐宿	南松浦郡峰宿町	平地	6m×		中央に炉址	弥生土器	中期前半	4
3	大坪	平戸市津吉町	隅丸方形	2.8m×		西側に浅い周溝	弥生土器	中期前半	5
4	富の原１号 〃　２号	大村市富の原 〃	円形 円形	径4.5m 径5.7m		中心に炉 〃	扇平打製石斧，ト石 磨製石斧	中期前半 〃	6
5	稗田　1 〃　2	大村市	円形 円形	径6.6m			 ガラス小玉	弥生 〃	7
6	今福	南高来郡南有馬町 〃	隅丸方形 円形	6.7m×７m 径10m	4	周溝 ベッド北遺構	礫器，ガラス玉	後期前半 終末	1
7	西ノ角	北高来郡森山町	隅丸方形				鉄鎌	後期後半	2
8	白井川１号 ２号 ３号	東彼杵郡東彼杵町	隅丸方形 隅丸方形(?) 隅丸方形	7.7m×9m ４m ５m×4.7m	4 4	炉址 中央に址	鉄鏃，２種の可能性	終末 〃 〃	8
9	一野１号 〃２号	南高来郡有明町	隅丸方形 〃		2		 ト石，石鏃，叩石(2)	後期前半 〃	**本書**



第14図　県内弥生時代住居址実測図（1/125）

住居址は県北部，県中央部[註9,10]，県南部，そして離島部[註7]からそれぞれ若干検出されているが，時期的に弁別出来るのは前期後半８基，中期前半２基．中期後半２基，後期前半１基，後期後半１基，後期後半から終末４基である。またそのほとんどは竪穴式住居である。

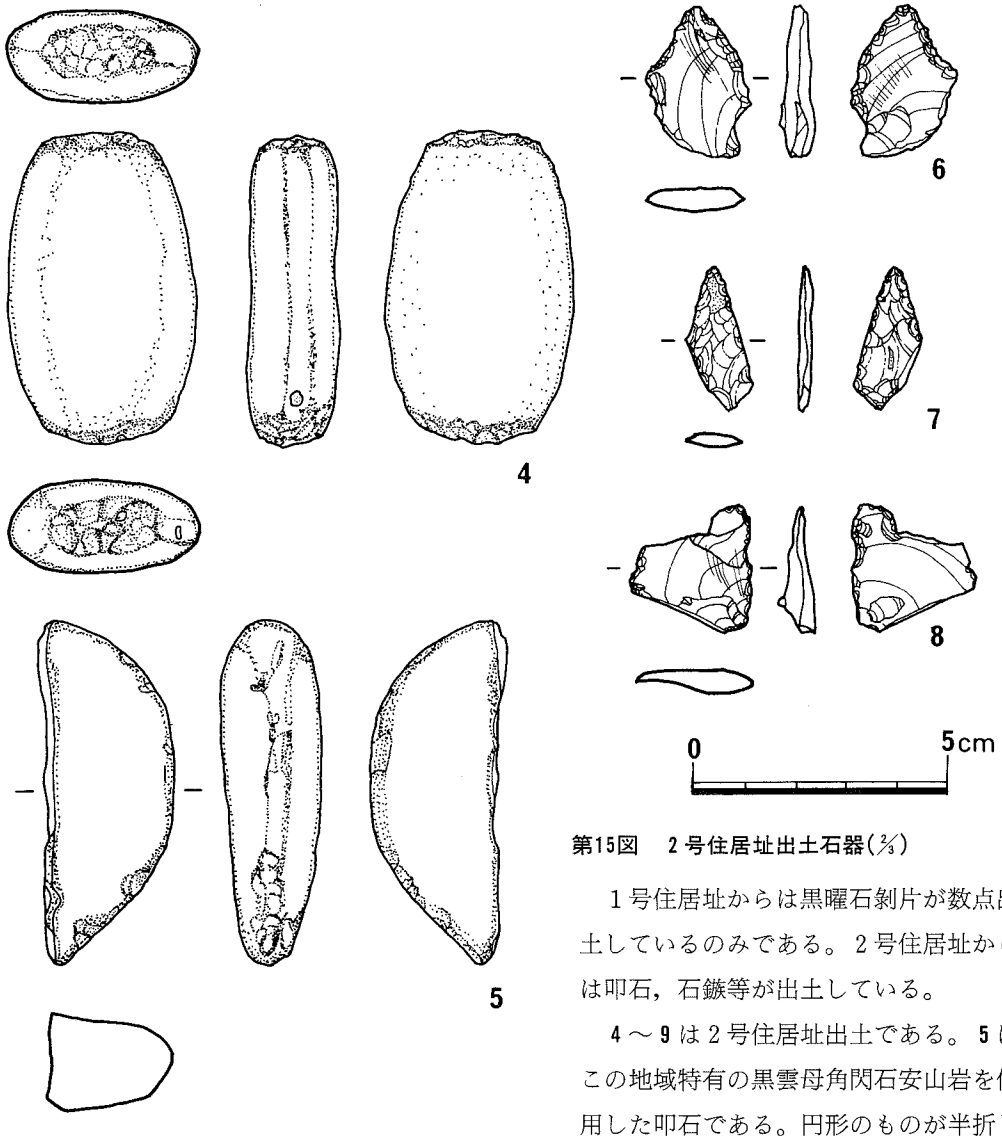
平面形は四反田遺跡[註6]に代表されるように前期後半の資料は円形，中期では前半の大坪地区が隅丸方形[註8]，後半の富の原遺跡[註9]では円形が認められる。後期では隅丸方形が基本であるが，白井川３号住居址[註11]や今福遺跡のように円形に近いタイプも見られる。九州においては中期後半以降円形から方形の竪穴住居址が主流になると言われているが，本県においては後期になっても県南部，県中央部共に円形住居が作られている。規模は前期後半や中期前半の四反田遺跡や大坪遺跡で３ｍ程度の小型住居址が報告されているが，円形竪穴住居址で径４ｍから５ｍが一般的であり，方形竪穴住居の場合は一辺が６ｍ前後のものが多い。主柱穴は２個のものと４個の例が多いとされているが，多くのピットが併存する場合，どれが主柱穴に当たるのかの判断が付かない場合がある。四反田遺跡では前期後半の段階から双方のタイプが確認されている。時期の如何にかかわらず住居址の規模によってその数が決定されるのであろう。

炉跡は時期を問わずその中心部にあるのが普通であるが，一野遺跡の例のように確認出来ない場合も認められる。ベッド状遺構は現在今福遺跡で１基が確認されているにすぎず，どこまで一般的であるかは不明である。周溝は，一般的には後期に入るとその残存率は急速に減少すると言われているが，一野遺跡２号住居址や今福２号住居址のように終末期まで残る例もあるなど一様とは言えない。(第**14**図)

以上本県における弥生時代の住居址を概観してみたが，現在集落として捉えられる遺跡が先の四反田遺跡を除いて発見されておらず，時期的あるいは地域的な確とした特徴的な要素を探す判断材料が無いのが実情である。今後の発見に期待するしかない[註13]。

註４　長崎県教育委員会「今福遺跡Ⅱ」長崎県文化財調査報告書　第77集　1985
　　長崎県教育委員会「今福遺跡Ⅲ」長崎県文化財調査報告書　第84集　1986
註５　長崎県教育委員会「西ノ角遺跡」長崎県文化財調査報告書　第73集　1985
〃６　佐世保市教育委員会「したんだいせきニュース」第１号～第７号　1991
〃７　長崎県教育委員会「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書　第２集　1964
〃８　平戸市教育委員会「津吉遺跡群」1986
〃９　大村市教育委員会「富の原」大村市文化財調査報告書　第12集　1987
〃10　大村市・稗田遺跡調査会「稗田遺跡」1988
〃11　東彼杵町教育委員会「白井川遺跡（Ⅱ)」東彼杵町文化財調査報告書　第４集　1990
〃12　宮本長二郎『住居と倉庫』「弥生文化の研究７　弥生集落」所収　雄山閣　1986
〃13　県内には壱岐原の辻遺跡やカラカミ遺跡，あるいは田平町里田原遺跡のように当然集落が予想される大遺跡があるが，まだ住居址は未発見である。

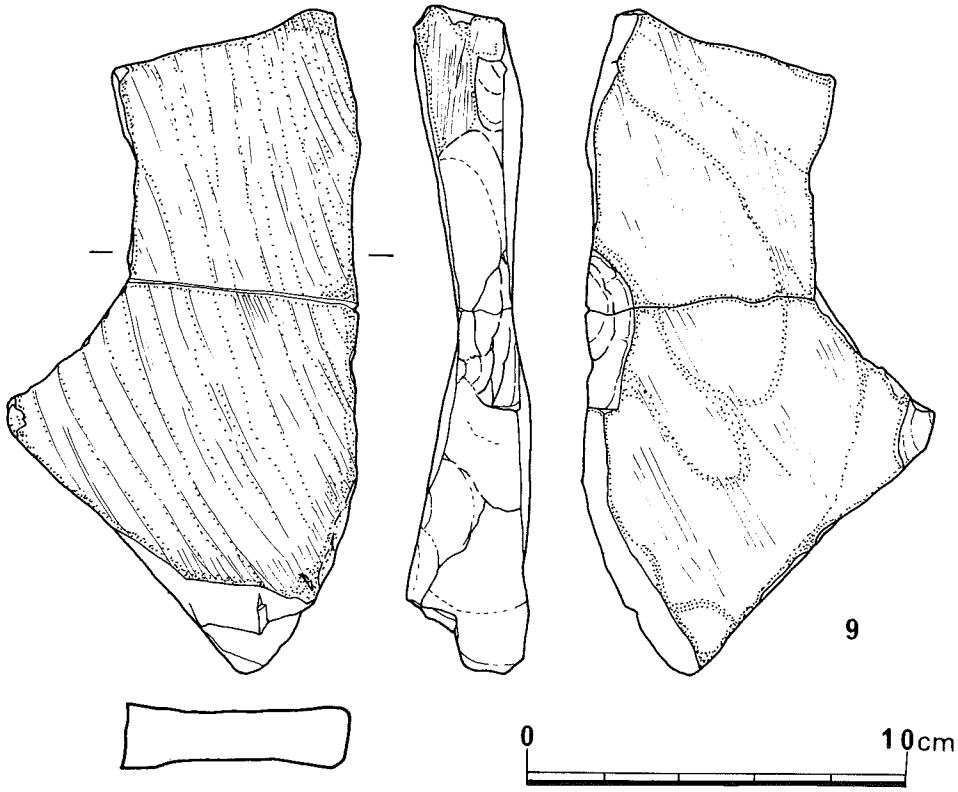
出土石器（第15・16図）



第15図　2号住居址出土石器(⅔)

1号住居址からは黒曜石剝片が数点出土しているのみである。2号住居址からは叩石，石鏃等が出土している。

4～**9**は2号住居址出土である。**5**はこの地域特有の黒雲母角閃石安山岩を使用した叩石である。円形のものが半折したものと考えられる。側面全体に微かに敲打痕を残す。**4**も黒雲母角閃石安山岩製の叩石で，上下両端の明確な敲打痕を残す。長さ約6cm，重さ55g程と小型のものである。**6**は石鏃の未製品と考えられる。漆黒の黒曜石製。**7**は安山岩製の石鏃である。両脚部が折れている。側縁が直線となる凹基式のものと考えられる。**8**は漆黒の黒曜石製の剝片石器である。一片に使用痕が残る。**9**は砂岩製の砥石である。両面とも中央部が5mm～1cm程凹む程度，使用されている。両面とも縦方向に研いでいる。側面にも一部使用痕が残る。**7**の石鏃は縄文時代のものが竪穴住居作成時に混入したものと，**6**は作りも雑であり住居址当時のものと考えられる。

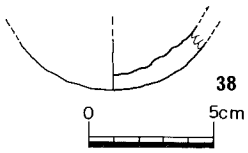


第16図　2号住居址出土石器(½)

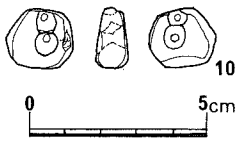
3　石棺（第19図）

調査区1区の中央東端より，石棺が1基検出された(第4図)。蓋石はなく，石棺東半も旧耕作地の段を造るために削り取られ消失，北側も天地返しによって削られていた。Ⅳ層上面から10～15cm程掘り下げて土壙を造り，そこにこの地特有の黒雲母角閃石安山岩の丸い自然石を使用して東西を主軸にして棺を造っている。石棺の規模（棺内）は，幅20～25cm，長さは推定であるが，1m程であろう。また，棺床には荒い砂が敷いてあった痕跡が残り，栗石があったものと思われる。過去この付近で石棺が5基検出されているが，どれも同じような自然石を使用したものである。[註14]

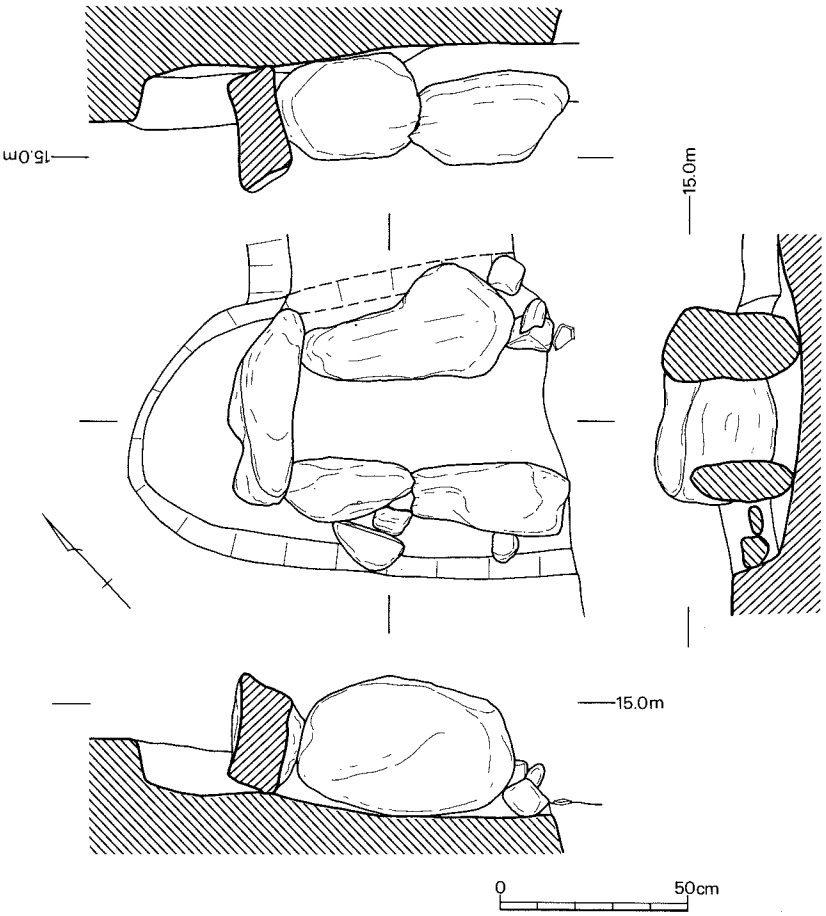
遺物は石棺の東端から須恵器片が出土した(第17図38)。小型の壺か甕の底部片で内外面とも横ナデを施している。この須恵器が棺内か棺外ものもか微妙なところであるが，この石棺に伴うものであることは確かであろう。なお，古墳時代の遺物として，2区の覆土より硬玉製装飾品が出土した(第18図10)。六角形に近い形状をし，淡緑色を呈する。裏表側面とも丁寧に磨き上げ，穿孔を2か所開けている。平玉と考えられる。



第17図　石棺付近出土土器(⅓)



第18図　硬玉製装飾品(⅔)

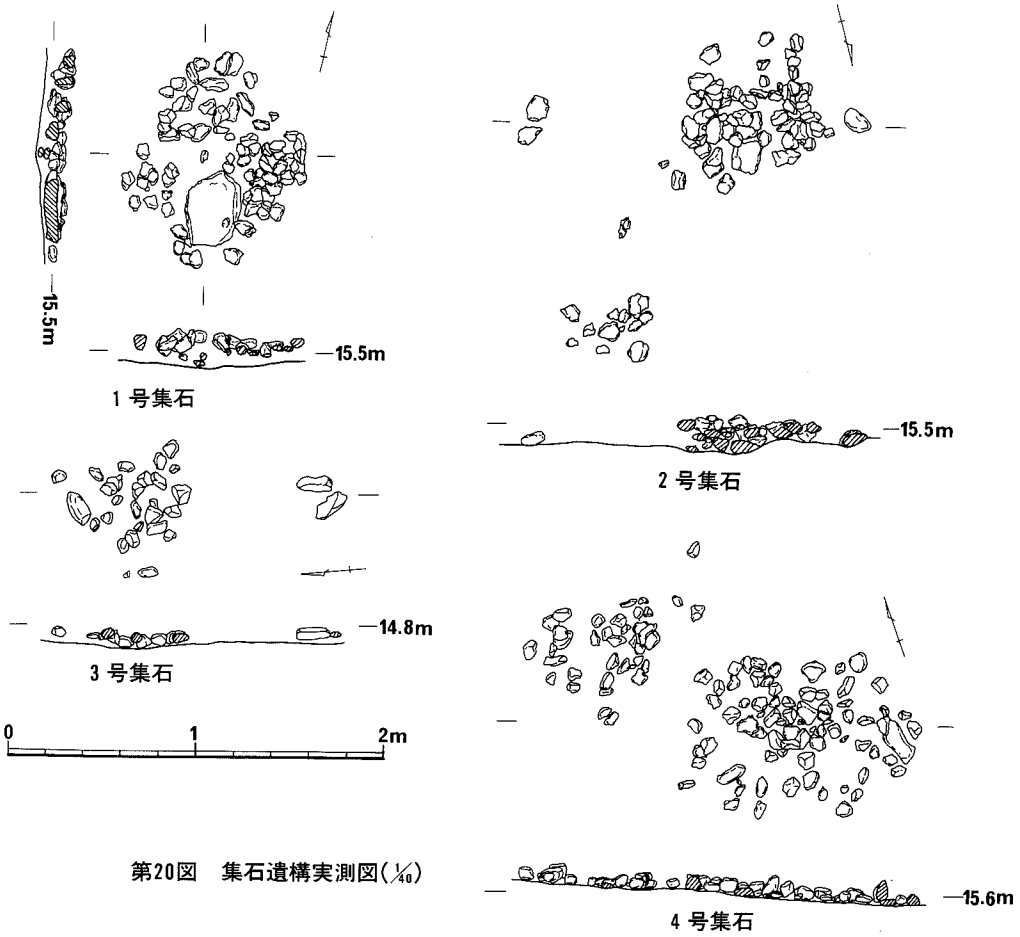


第19図　石棺実測図(1/20)

註14　古田正隆他『一野遺跡概報』長崎県島原土木事務所1960，古田正隆『一野遺跡』で報告されている。

4　集石遺構（第20図）

調査区２区より，４基の集石遺構が検出された(第４図)。どれもこの地域特有の黒雲母角閃石安山岩を使用している。１号集石遺構は1.2m×1m程の楕円形の集石で，40cm×30cm程の平石の回りに拳大の小礫を配している。掘り込みはほとんどなく，中心部に２・３の小礫が重なるのみである。２号集石遺構は約80cm四方に小礫を配している。50cm～60cm程離れた所にも小礫が散在する。一部に浅い凹みがあり，その部分には小礫が重ねられている。３号集石遺構は70cm×60cm程の範囲にややまばらに小礫が置かれている。掘り込みはない。４号集石遺構は1.3m×80cm程の範囲とそこから北西に約20cm程離れた所に70cm×60cm程の範囲とに集石が見られる。これも掘り込みはまったくなく，拳大の小礫が散在している感じである。これらの集石遺構はどれもⅣ層中にあり，Ⅳ層の遺物包含状況からして縄文時代の遺構であり，Ⅳ層出土の土器が条痕文土器主体であることを考えると，これにともなうもので縄文時代早期のものとも考えられる。



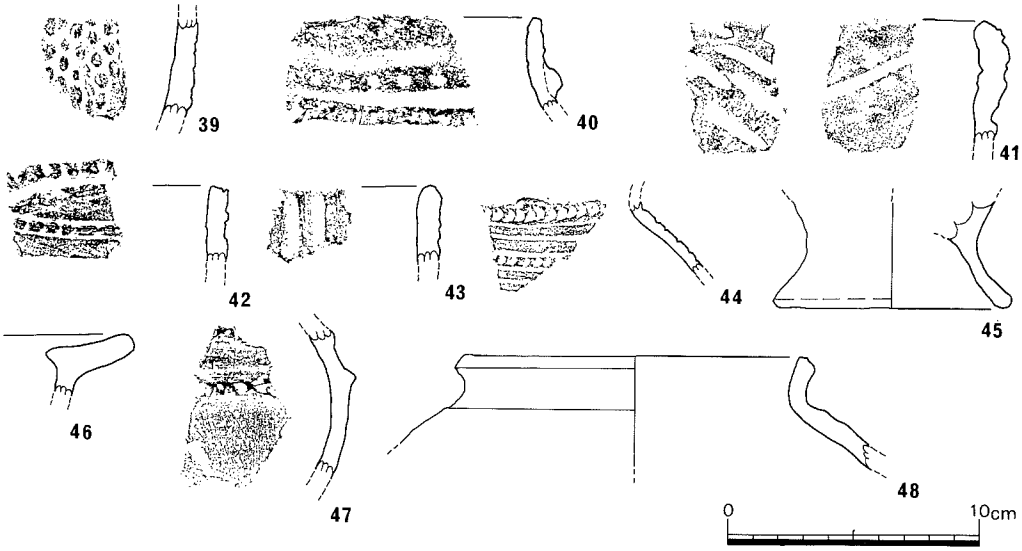
第20図　集石遺構実測図(1/40)

5　Ⅱ層の遺物

Ⅱ層は畑の天地返しによる撹乱を受けているため，縄文時代から中世までの遺物が混入している状況である。

出土土器（第21図）

39は押型紋土器片で，胎土に砂粒を多く含み，淡褐色を呈する。**40**～**42**は阿高系の土器である。**40**は鉢の口縁部片で口縁部下に突帯を付け，刻み目を施している。胎土には滑石粉を多く含み，赤褐色を呈する。**41**は鉢の口縁部片で，内外両面に太い斜めの沈線を引き，胎土には多くの砂粒を含む。暗褐色を呈する。**42**も鉢の口縁部片で口唇部と口縁部下にヘラ状のもので横に押し引きを施している。内面は横ナデ調整を行い，胎土に砂粒を多く含み，暗褐色を呈する。**43**は深鉢の口縁部片で，口縁部外面に縦にヘラ削りを行い施紋している。口唇部は横ナデ調整を施し，胎土には微細な砂粒を多く含む。黄褐色を呈する。縄文時代後期のものと考えられる。



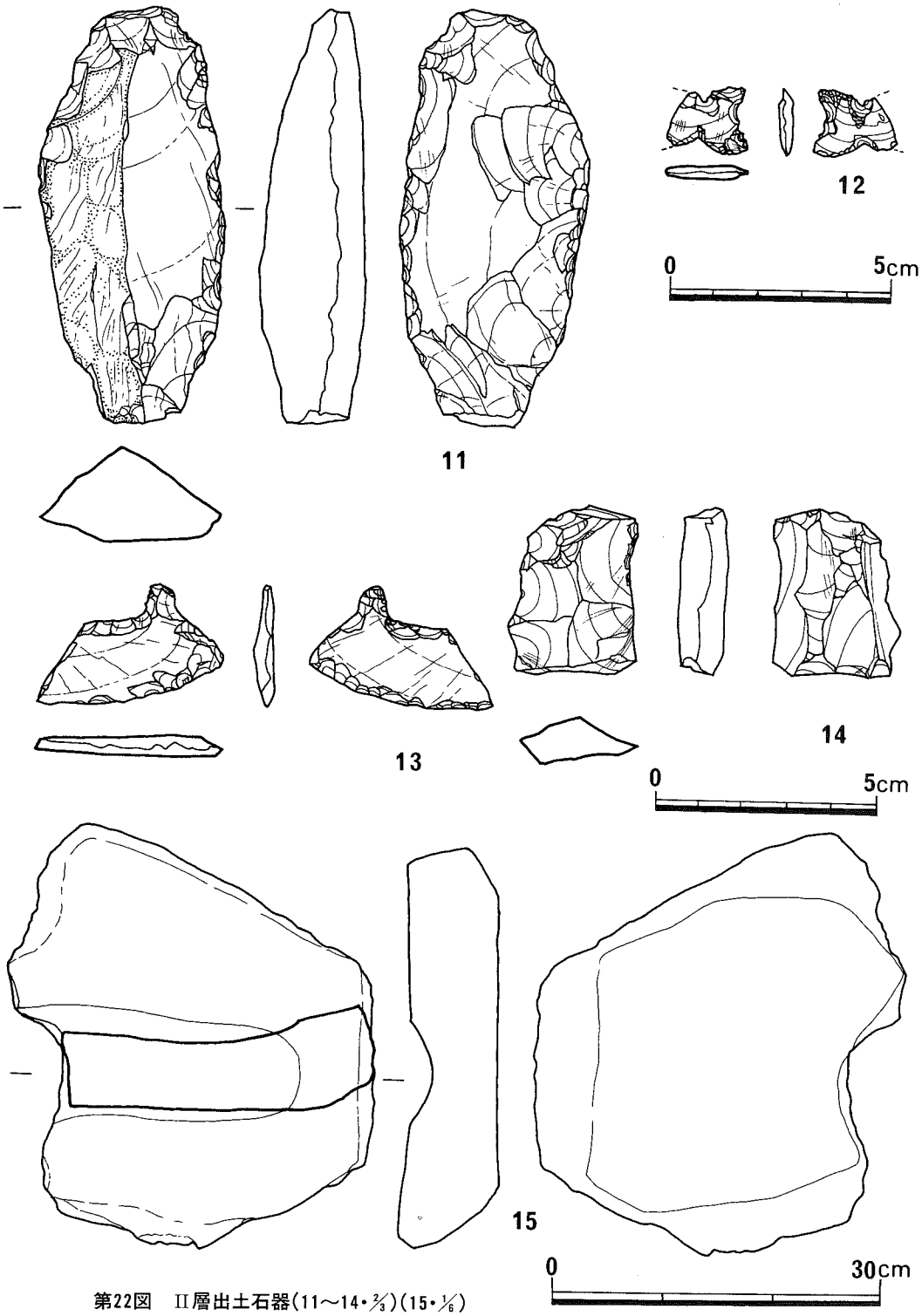
第21図　Ⅱ層出土土器(1/3)

44は西平式土器の肩部片である。器壁は薄く，外面はヘラ磨きの後，細い沈線を平行に引き，沈線の間に２列半裁竹管紋を施している。胎土に微細な砂粒を多く含み，淡黄色を呈する。

45は土師器甕の底部高台片で内外面とも横ナデ調整を施している。胎土には細かな砂粒を含み，褐色を呈する。**46**は弥生土器の甕の口縁部片で，内外面とも丁寧な横ナデ調整で仕上げている。胎土には微細な黒雲母粒や砂粒を多く含み，黄褐色を呈する。**47**は弥生土器の壷の胴部片で，外面に平行に２本の刻み目を付けた突帯を付けている。突帯の間は横ナデを施し，突帯の下の部分には刷毛目が残る。内面は上半を横ナデで下半をヘラ削りで仕上げている。胎土には細かな砂粒を多く含み，黄褐色を呈する。**48**は須恵器の壷の口縁部片で，復元口径は13cmを測る。口縁部から内面にかけては丁寧な横ナデを，胴部外面にはタタキを施した後，横ナデを行っている。胎土は緻密で，灰褐色を呈する。

出土石器（第22図）

11は安山岩製のスクレイパーである。両側面と先端部を剝離加工している。３面の内１面は自然面を残す。剝片尖頭器とも考えられるが，先端部は１つの衝撃による折れではなく，細かな剝離加工を行っている。**12**は十字型の異形石器と考えられる。漆黒の黒曜石製で３分の１程折れている。**13**は安山岩製の石匙である。小型のもので刃部中程で折れている。**14**は乳白色の縞のある黒曜石製の両側を使用面としたスクレイパーである。上下両端が単発の衝撃により折れている。**15**はこの地域特有の黒雲母角閃石安山岩製の石皿である。４分の１程欠損している。裏面は平らな自然面を利用し，側面・表面には形を整えるための敲打痕が残る。凹部にも敲打痕があり叩き石を使用してものを叩き潰したものと考えられる。凹部は長い楕円形となっており，深いところで表面から２cm程窪んでいる。これら石器も縄文時代から弥生時代のものが混在している。



第22図　Ⅱ層出土石器(11～14・⅔)(15・⅙)

6　Ⅲ層の遺物

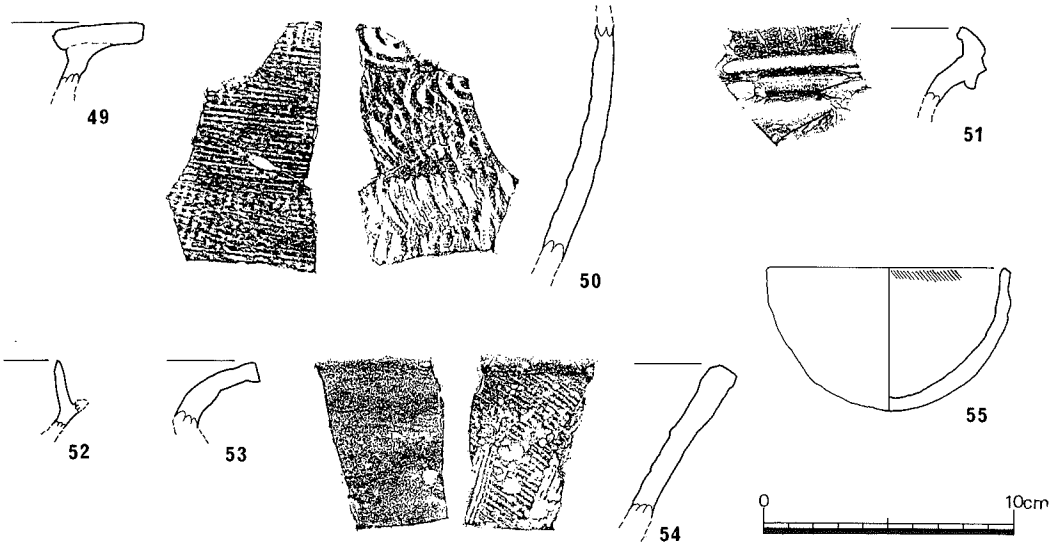
Ⅲ層も畑の天地返しによる掘削を受けており，調査区１区の東側と２区の東隅に部分的に残存していたに過ぎない。厚いところで30cm程，薄いところでは数cm程しか残っていない。弥生時代から中世の遺物を包含している。

出土土器（第23図）

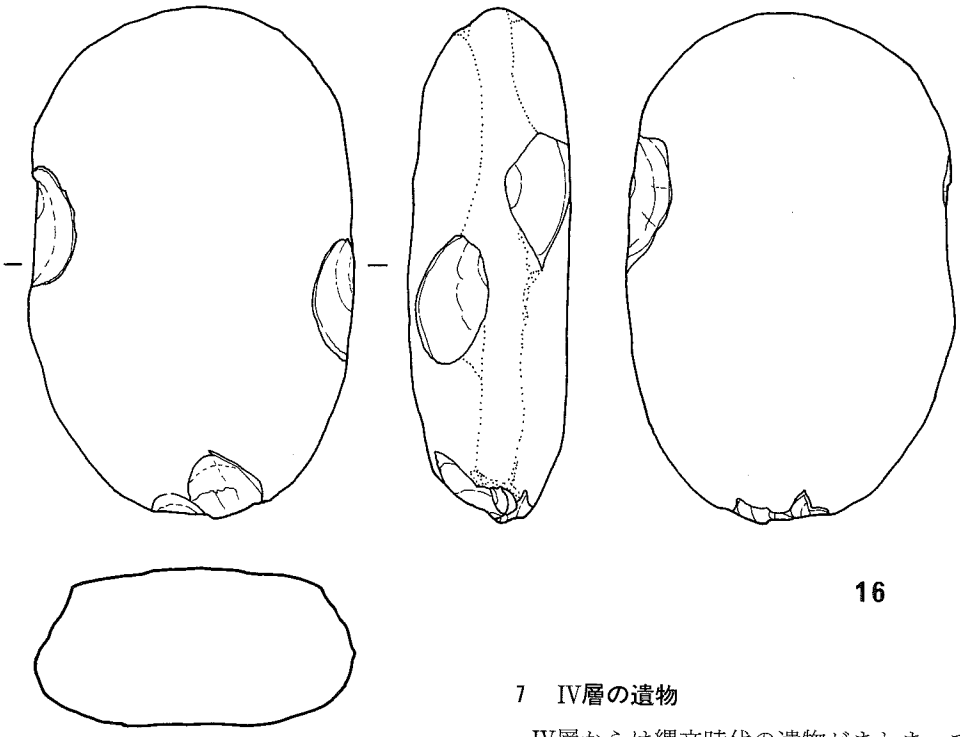
49は弥生土器の壷の口縁部片である。口縁部平坦部から内面にかけて横ナデをした後丹を塗っている。外面はやや風化している。**50**は須恵器片で内外両面に明瞭なタタキの痕を残す。**51**は須恵器壷の口縁部片で口縁部外面に回転ナデの調整痕を残す。**52**は須恵器坏身片で内外両面に回転ナデを施している。器形からして６世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。**53**は土師器の壷の口縁部片である。内外面とも回転ナデで仕上げ，胎土には微細な砂粒を多く含む。**54**はすり鉢の口縁部片である。淡褐色を呈する。**55**は弥生時代終末の土器から古式土師器の埦になるものと考えられる。丸底の埦で外面には荒いヘラ削りの痕跡が残る。内面には口縁部縁から1.5cm程の間に右下がりに斜めの刷毛目が残る。口唇部はやや雑ではあるが横ナデ調整で仕上げている。胎土には微細な黒雲母片や砂粒を多く含む。色調は淡黄褐色を呈し，内面には丹を塗っていた可能性もある。

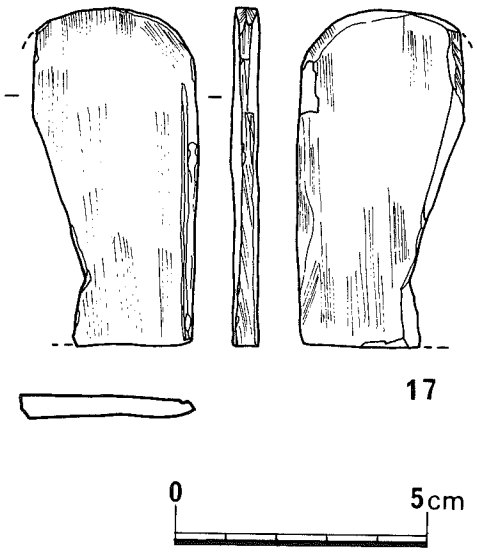
出土石器（第24図）

16は黒雲母角閃石安山岩楕円礫を使用した石錘である。重さは236ｇあり，両側と１端の３か所を打ち欠いている。**17**は黄茶色で非常にきめの細かい泥岩を使用した砥石である。両平坦面と側面も研磨に使用している。１端には細い溝状の使用痕も残る。その使用痕からして金属を研磨したものと考えられる。



第23図　Ⅲ層出土土器(1/3)





第24図　Ⅲ層出土石器(⅔)

7　Ⅳ層の遺物

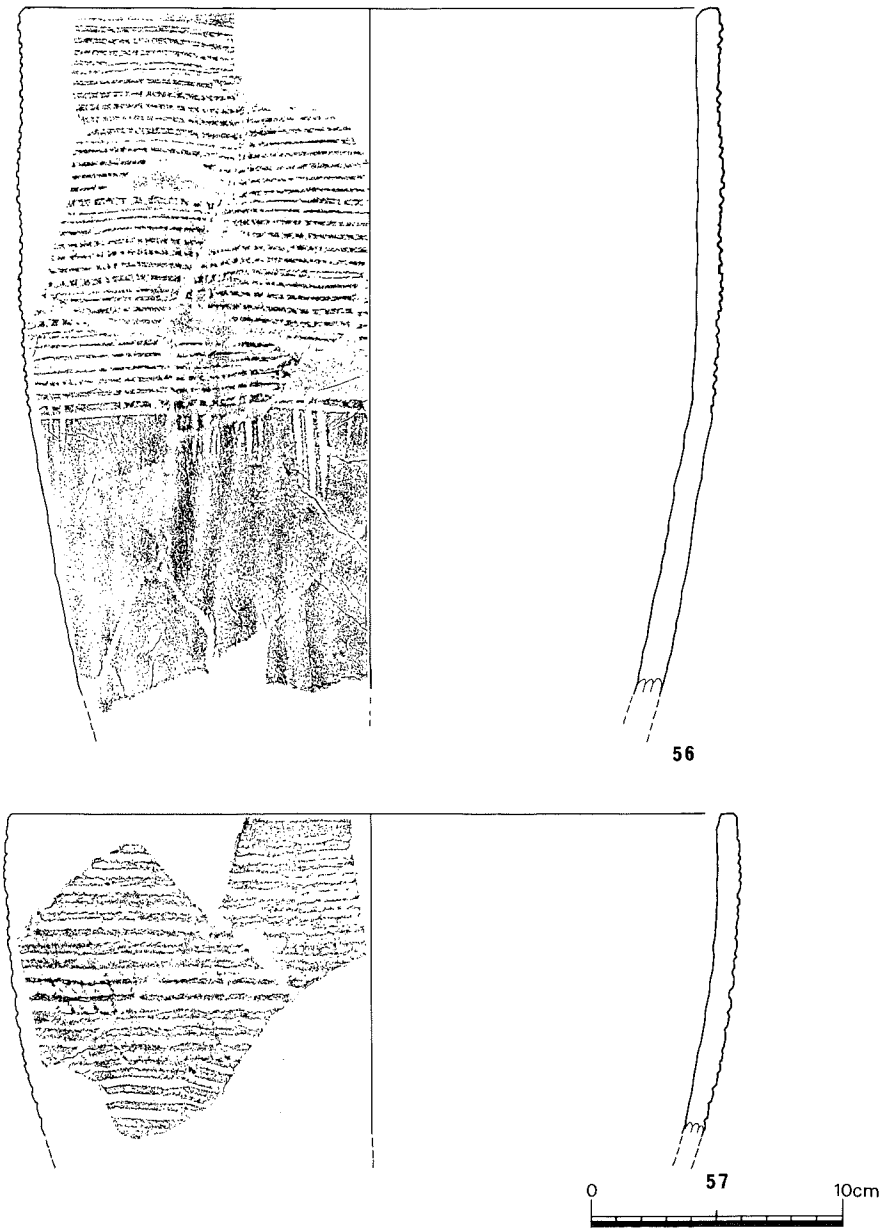
Ⅳ層からは縄文時代の遺物がまとまって出土した。出土遺物より，縄文時代早期から前期にかけての包含層であると考えられる。特に注目を引くのは出土土器の大半を占める円筒形条痕文土器である。

出土土器（第25・26・29図）

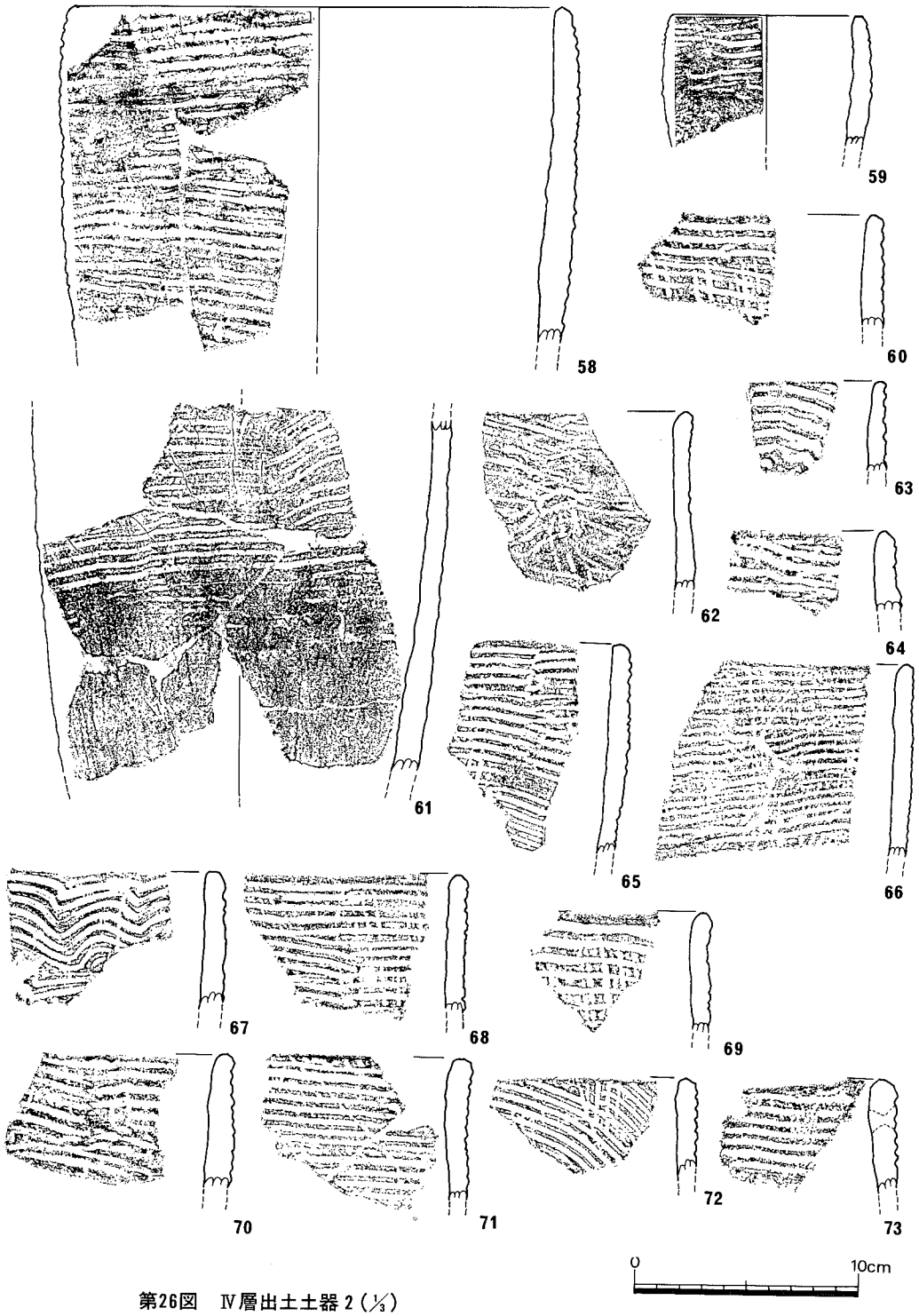
条痕文土器（55～78・82）　土器の形態は円筒形の深鉢で平底に成るものと考えられる。口縁部はほぼ直立し，胎土にはこの地域特有の黒雲母角閃石安山岩粒を含むものが多い。焼成は良く，色調は黄褐色から赤褐色を呈し，器壁は1cm前後である。条痕は明瞭に施されており，調整ではなく明らかに紋様として付けられている。

56は3号土壙（第27図）より出土したもので口縁部端から胴部中程まで縦に条痕を引いた後，横に条痕を引いている。条痕文部下の胴部には

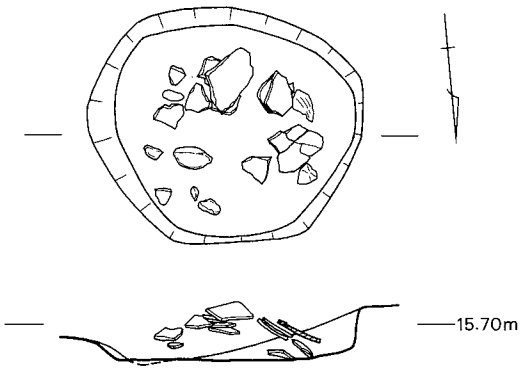
貝殻表面で潰しを，口唇部から口縁部内面にかけてはヘラ磨きを施している。復元口径は約30cmで，器高は40cm程に成るものと考えられる。条痕は７条を１単位として引いている(第**28**図)。胎土はきめ細かいが黒雲母粒や砂粒を含み，淡黄褐色を呈する。**57**はやや胴部が膨らみぎみになる。口縁部端から胴部にかけて横に条痕を引き，口唇部は横ナデを内面は縦にヘラ削りを行った後に横ナデを施している。胎土はきめ細かいが微細な砂粒を含み，明褐色を呈する。口唇



第25図　Ⅳ層出土土器１(⅓)



第26図　Ⅳ層出土土器 2 (1/3)



第27図　3号土壙実測図(1/20)　0　50cm

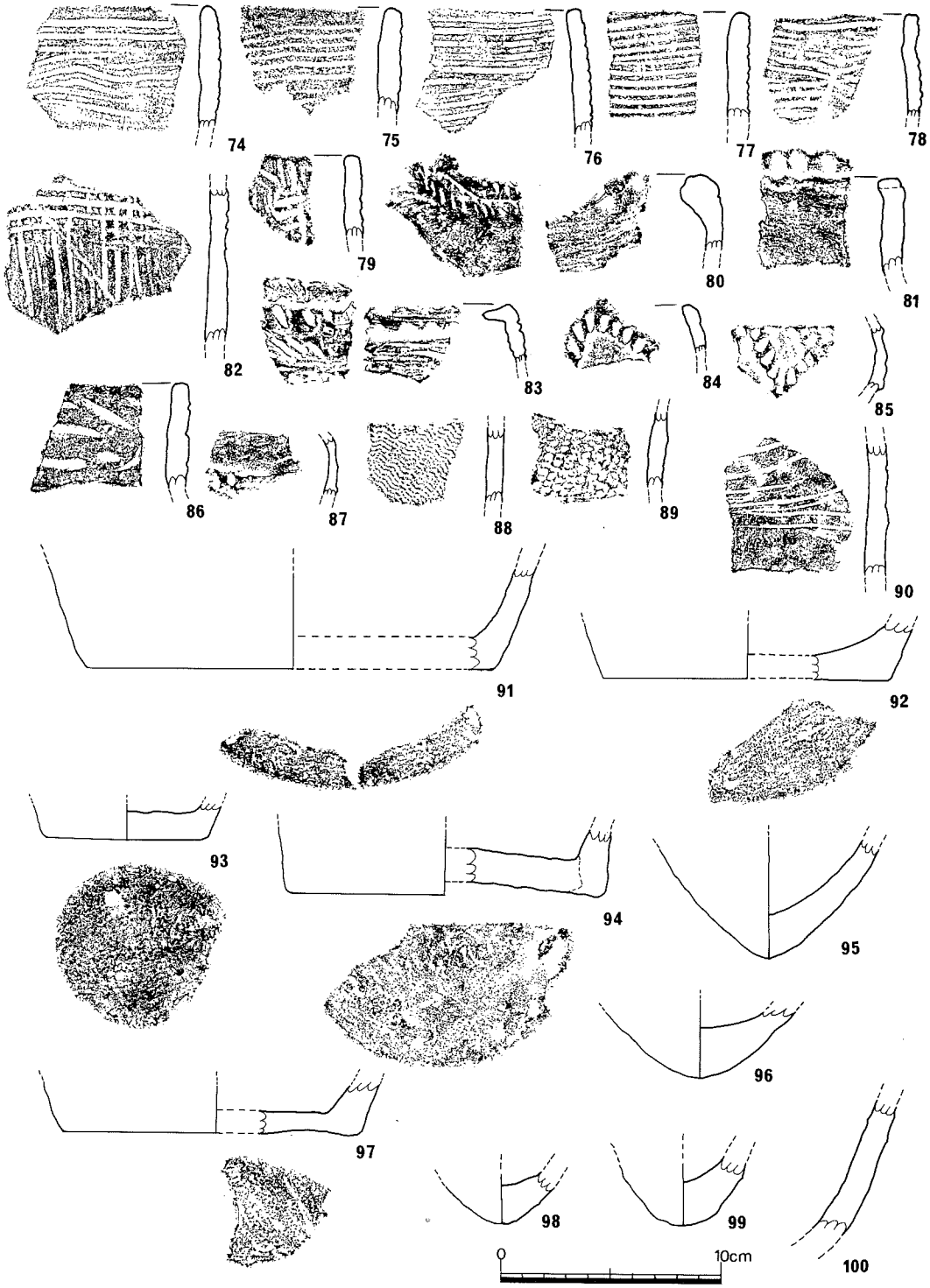
第28図　条痕文拓本(56)

部は平坦である。**58**は口縁部がほぼ直立し，横に条痕を引く。内外面ともやや風化している。胎土に黒雲母角閃石安山岩粒を多く含み，明褐色を呈する。**59**は小型の深鉢片で，内外面ともやや風化している。胎土には黒雲母角閃石安山岩粒等を多く含み，黄褐色を呈する。復元口径は約8.6cmを測る。**60・65・68・69・82**は条痕を縦に引いた後，横に引いている。いずれも胎土に黒雲母角閃石安山岩を含む。**61**は胴部片で，内面にはヘラ磨きを施す。**62**は口縁部片で波状の条痕が重なり合う。口唇部から内面にかけてヘラ磨きを施す。**63**は口縁部片で波状の条痕が付く。**64・66・70・71・73～78**は口縁部片で横の条痕文を付け，口唇部から内面にかけて**71・73・74～76**はヘラ磨きを，他は横ナデを施す。**73**は補修孔を穿つ。**70**は色調・胎土からして底部**93**と同一個体と考えられる。**67**は口縁部下に条痕文を波状に付け，その下には平行の横の条痕を付ける。口唇部から内面にかけては横ナデを施す。**72**は縦に条痕を引いた後右下がりに弧状の条痕を引く。口唇部から内面にかけてはヘラ磨きを施す。

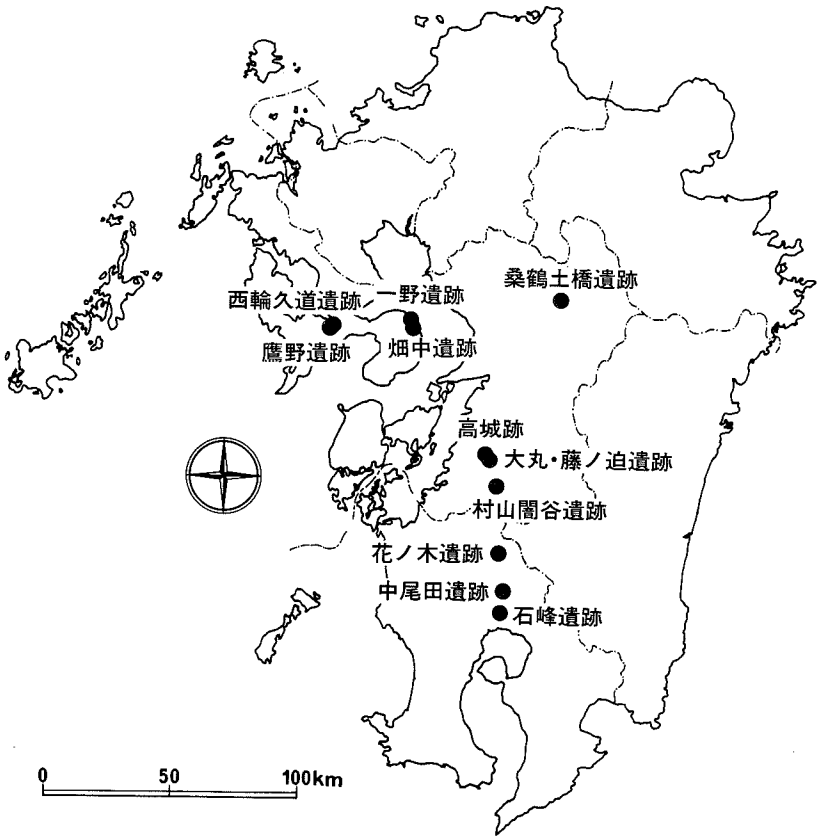
この条痕文土器の器形は胴部と底部の接合資料はないが，口縁部から胴部の形態，口縁部**70**と底部**93**が同一個体と考えられることより，円筒形平底の深鉢形をなすと考えられる。

また，条痕の形態は出土例の多いものから，まず，口縁端から胴部にかけて横にほぼ平行な条痕文を付すもの(押し引きを施すものもある)。次に口縁端から胴部にかけて縦に条痕を引いた後横に引くもの。更に口縁部から胴部にかけて波状に引くもの。最後にこれら3例が混在するものに大別される。この条痕文土器の時期であるが，Ⅳ層上面から落ち込む1～6号砂遺構より出土する土器が縄文時代中期から後期初頭にかけてのものであることを，1点づつではあるが押型紋土器と撚り糸文土器がⅣ層より出土していることなど考えると縄文時代早期から前期にかけてのものであると思われる。

この土器の系譜であるが，県内では類例がほとんどなく，現在のところ一野遺跡より約1kmほど南の畑中遺跡のⅣ層と同じ明褐色粘砂層より，同一の条痕文土器が出土している[註15]。また，大村湾の最奥部南岸の丘陵地帯にある鷹野遺跡[註16]・西輪久道遺跡[註17]からも押型文土器・尖底の底部と共に出土している。これは本遺跡のⅣ層の出土土器の様相と類似している。県外では手元にないものもあり資料に制約はあるが，鹿児島から熊本県にかけてその類例が出土している（第**30**図)。鹿児島県では鹿児島湾奥から北へ10kmほど入った標高約280mの台地縁片部にある石峰



第29図　Ⅳ層出土土器 3 (⅓)



第30図　円筒形条痕文土器出土遺跡

遺跡[註18]，石峰遺跡より北へ約10kmほどの所にある中尾田遺跡[註19]，川内川の上流にある花ノ木遺跡[註20]等から，縄文時代早期終末に位置するのもとして押型文土器・撚り糸文土器等と共に出土している。熊本県では南では球磨・人吉地方で村山闇谷遺跡[註21]，大丸・藤ノ迫遺跡[註22]，高城跡[註23]と3遺跡でこの手の条痕文土器が出土している。何れも押型文土器，塞ノ神式土器等と共に出土しており，縄文時代早期に位置付けられている。熊本県北部では阿蘇の外輪山のひとつ，俵山の西麓の緩傾斜地の標高約230mにある桑鶴土橋遺跡[註24]からも押型文土器，無文土器と共に出土している。このように，この条痕文土器の類例を探るに南九州系の土器であり，本遺跡においても縄文時代早期のものと考えられるであろう。本遺跡出土の条痕文土器は胎土からして当地域の土を使用しており，縄文時代早期における西南九州と当地域との人の交流を伺い知ることができる。

その他の土器（第29図）

79は口縁部片で，外面に口縁部端から直線的な紋様を描く。口唇部から内面にかけてはヘラ磨きを施す。胎土には微細な砂粒を含み，暗褐色を呈する。**80**は並木式と考えられる。波状の口縁部片で胎土に滑石粉を含み，明黄褐色を呈する。Ⅲ層からの沈み込みか。**81**も口縁部片で口唇部に摘んで凸凹をつけた突帯を付ける。胎土に石英粒をまばらに含み，茶褐色を呈する。**83**も口縁部片で口縁部端に右下がりに刻み目を付ける。内外面とも荒いヘラ削りを施す。胎土には滑石粉・微細な黒雲母片・貝片を含む。**84・85・87**は同一個体の破片で，器壁は薄く，胴部には不定型の刻み目のある低い突帯を付ける。胎土には滑石粉・砂粒を含み，黄灰色を呈す

る。**86**も口縁部片で外面に太く短い直線の紋様を施す。内面は横ナデで仕上げ，胎土には微細な砂粒を多く含み，黒褐色を呈する。**88**は細かい山形の押型文土器の胴部片である。胎土には微細な砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈する。**89**は撚り糸文土器片で胎土に砂粒を含み，暗褐色を呈する。**90**は外面に不規則な沈線文を描く。胎土に細かな砂粒を含み，暗黄褐色を呈する。塞ノ神式の可能性もある。**83**～**85**・**87**は鹿児島の春日式系と考えられる。

底部（第**29**図）

91～**94**・**97**は平底の底部片である。**91**を除き他は胎土に黒雲母角閃石安山岩粒を含む。**94**はやや上げ底である。**97**は内面の底と胴部の接合部分を指で強く押え込んでいる。これらが条痕文土器の底部になるものと考えられる。**95**・**96**・**98**～**100**は尖底の底部片である。何れも胎土に黒雲母角閃石安山岩粒を含み，色調は**99**が明褐色で他は黄褐色を呈する。外面にはヘラ状のもので潰しを施した痕跡を残す。条痕文土器の中で**57**のように胴部が内向するものがあり，これが尖底になる可能性もある。しかし，今のところ類例を見るに尖底のものはない。

出土石器（第**31**・**32**図）

18は刷り石である。玄武岩製で黄灰色を呈し，側面がツルツルに擦れている。**19**は安山岩製の尖頭状石器である。石匙とも考えられるが，明かに先端を尖らせ，先端を頂点とする２側に刃部を作る。**20**は安山岩製のスクレイパーである。くの字型になる１側に刃部を作り，刃部の上端には刃潰しを施す。**21**は安山岩製の局部磨製石斧である。刃部は欠損し，片面と両側面を研磨している。着柄部は敲打により，整形している。**22**は頁岩製の小型の磨製石斧である。刃部が欠損し，敲打により整形した痕跡を残す。**23**・**25**は凹基の石鏃である。**23**は青灰色の黒曜石製，**25**は安山岩製である。**24**は安山岩製の小型の石匙である。これらの尖頭状石器，スクレイパー，石鏃等は条痕文土器と同じく，縄文時代早期のものと考えられる。

註15　一野遺跡の調査と同時期に畑中遺跡の調査も行われており，見聞した。
　　尚，吾妻町の弘法原遺跡からも，同様の条痕文土器斤が数点見つけられた。

註16　『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集　1986　長崎県教育委員会

註17　『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第74集　1985　長崎県教育委員会

註18　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅳ『石峰遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）1980.3　鹿児島県教育委員会

註19　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅶ『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）1981.3　鹿児島県教育委員会

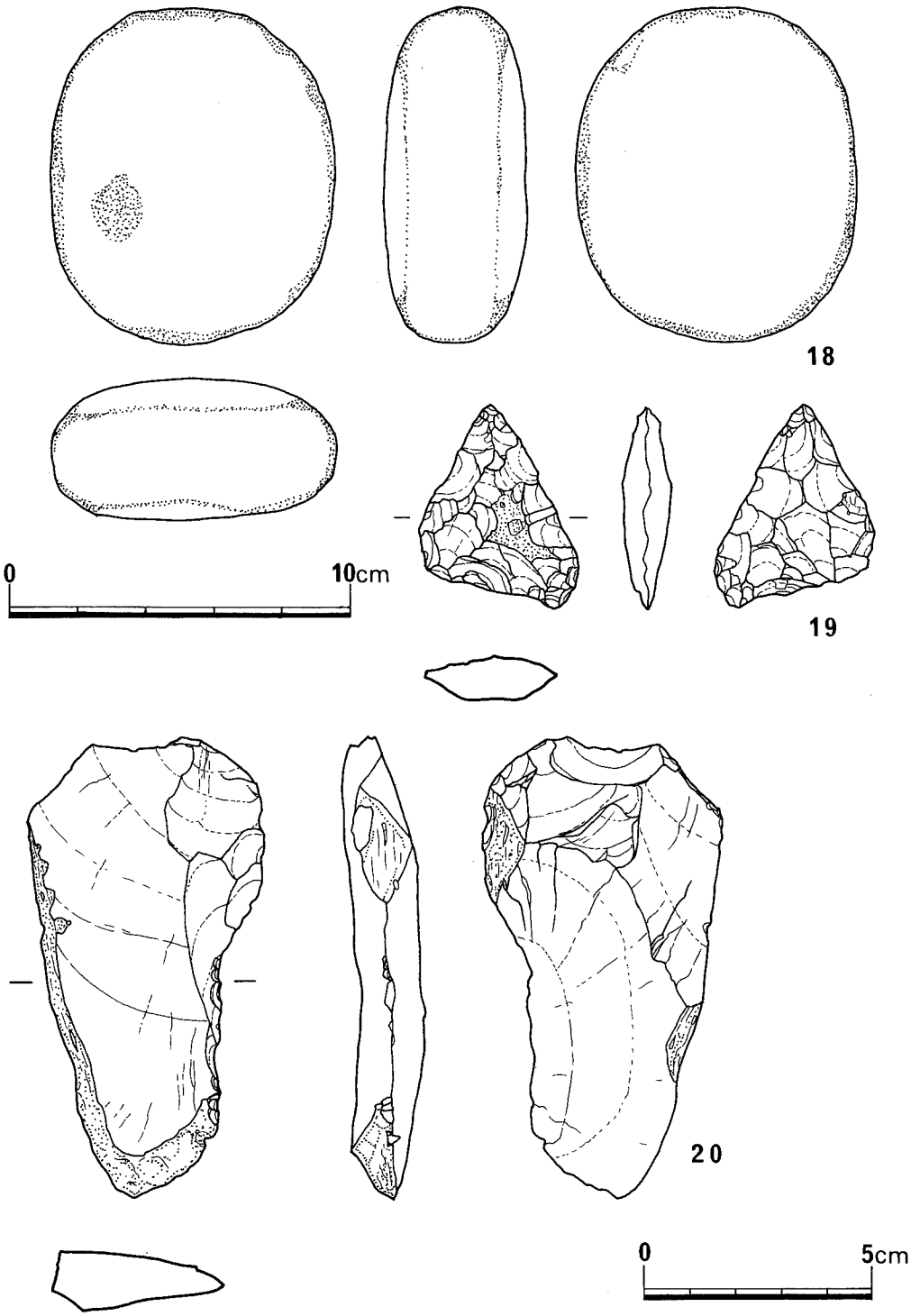
註20　『花ノ木遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（１）1975　鹿児島県教育委員会

註21　『村山闇谷遺跡発掘調査報告書』1988　人吉市教育委員会

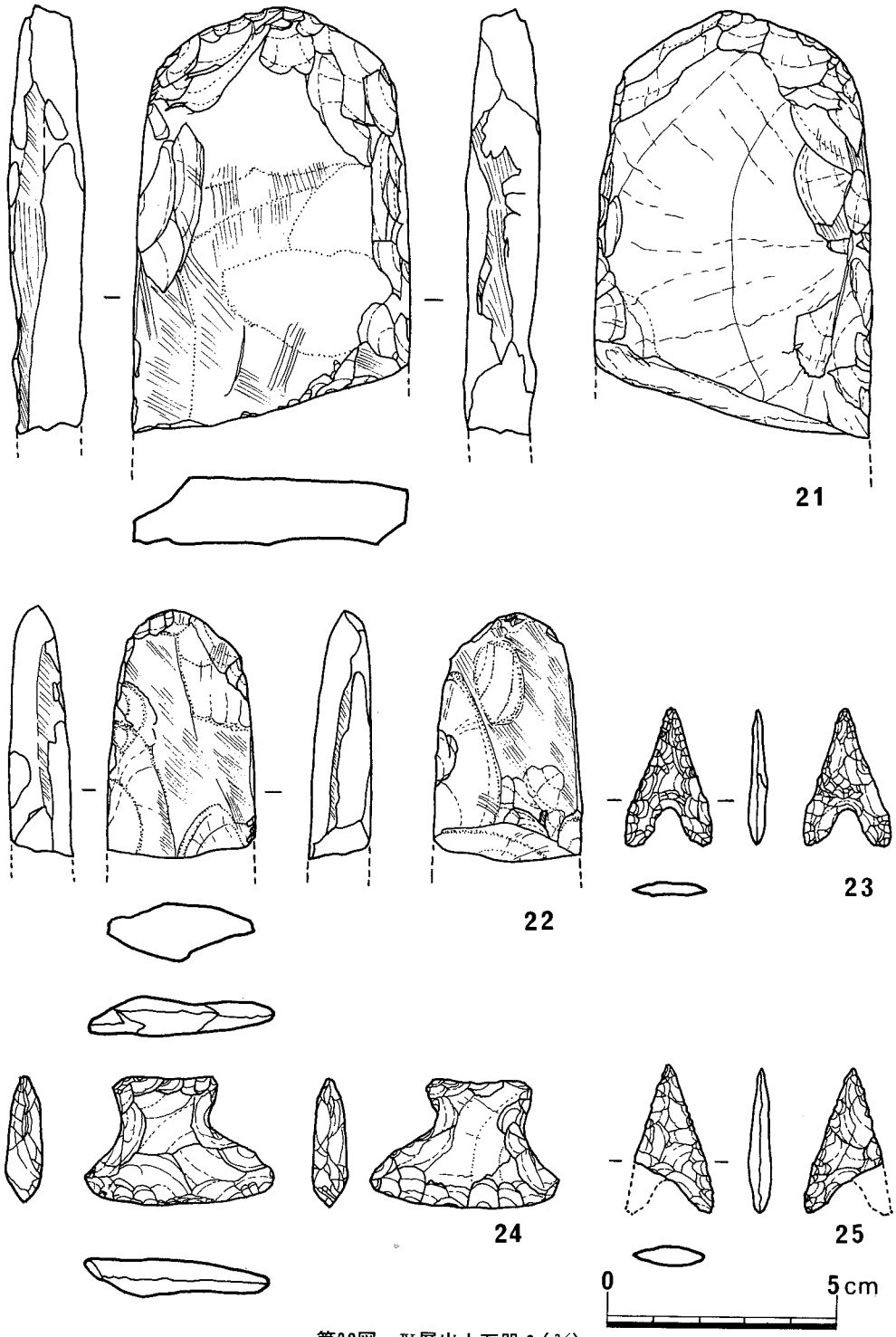
註22　『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告第80集　1986.3　熊本県教育委員会　参照

註23　『高城跡』熊本県文化財調査報告第95集　1988　熊本県教育委員会

註24　『桑鶴土橋遺跡』研究室活動報告２　1978　熊本大学法文学部考古学研究室



第31図　Ⅳ層出土石器１（18・½）（19・20・⅔）



第32図　Ⅳ層出土石器 2 (⅔)

V　まとめ

一野遺跡は，今回の調査前は弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡としてとらえられていたが，今回の調査により縄文時代早期から中世にまで及ぶ遺跡であることが確認された。

今回調査したような有明海に向けて延びる丘陵の先端部は縄文時代から古墳時代の各時期において主要な生活の場であったことを物語るものである。このような丘陵は国道251号線により寸断されてはいるが，いくつも残っており，今後，縄文時代から古墳時代にかけての生活遺構が検出されることが期待される。

最後に今後の課題を２つだけあげて，まとめとしたい。

今回，新たに確認されたⅣ層より出土する円筒形条痕文土器は当地域を中心に今後新たに検出される可能性があり，土器の形状・分布等をこの土器に伴う遺構と絡めおさえていくことにより当地域での縄文時代早期の様相を知る手がかりとなっていくであろう。この土器に伴うと考えられるものとしては今回，集石遺構しかなく，その性格は不明である。

また，今回の調査で検出された砂遺構の性格も本遺跡も含め，周辺のどのような環境のところから検出されるかにより，その性格が把握できてくるものであろう。なお，島原市の畑中遺跡でも同様な遺構が見受けられた。

図　　版

1 号砂遺構(南より)

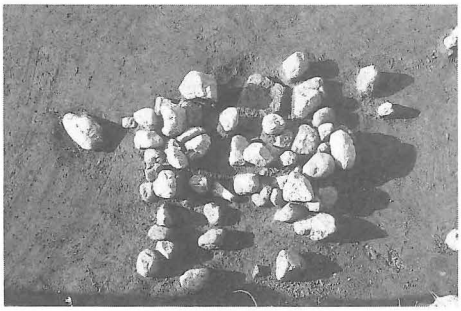
4 号砂遺構(東より)

1 号往居址(東より)

2 号往居址(北より)

石棺(南より)

1 号集石(東より)

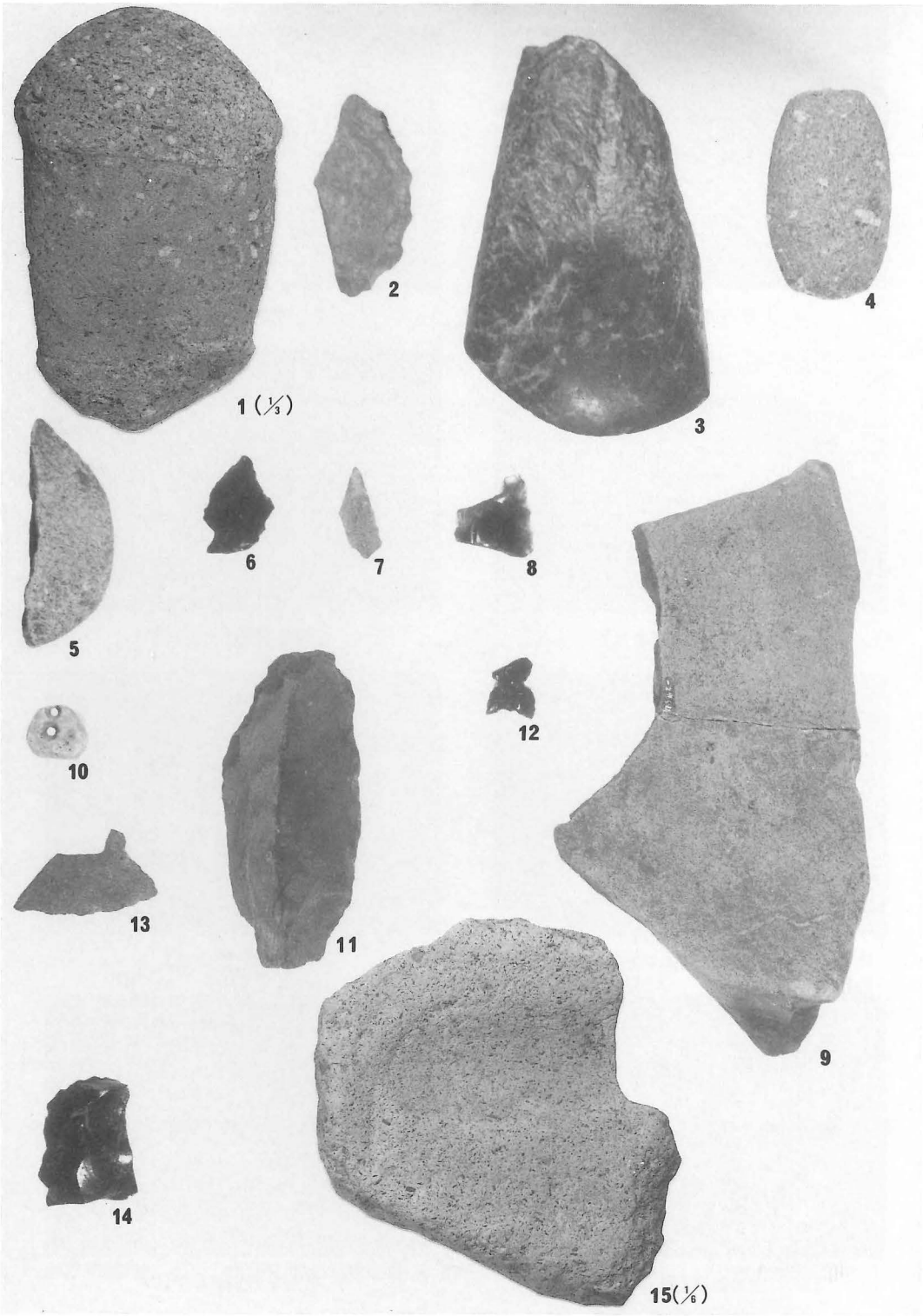


2 号集石(南より)

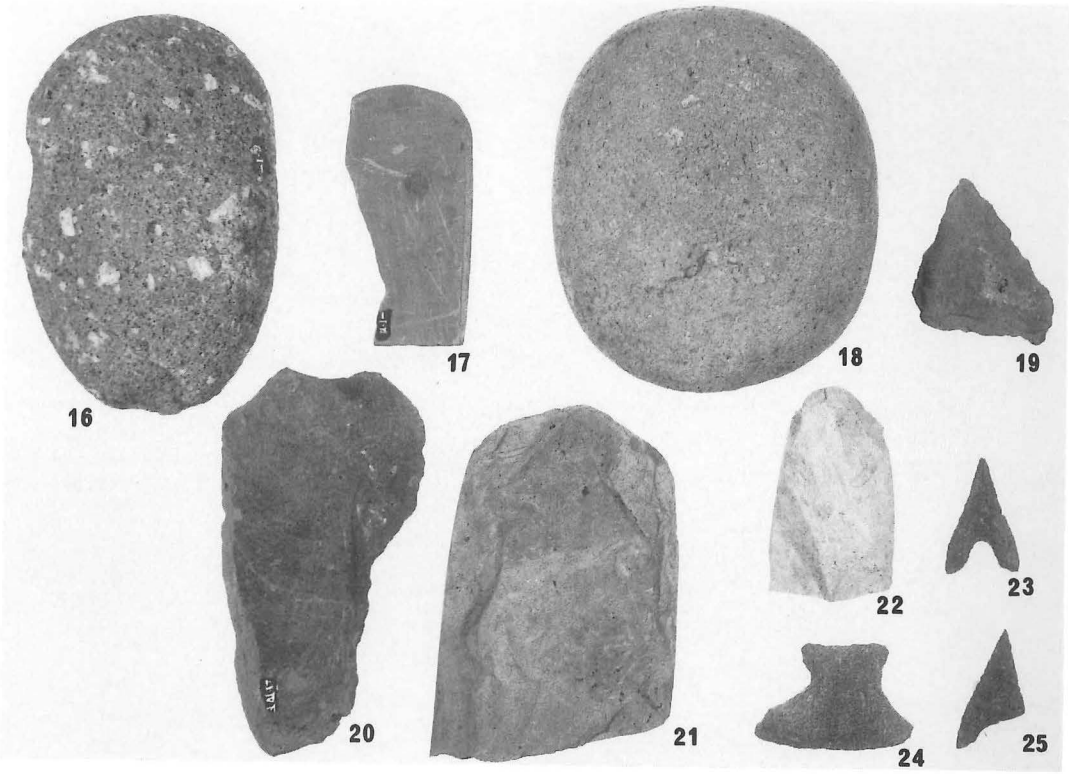
3 号土壙(南より)

遺構検出状況

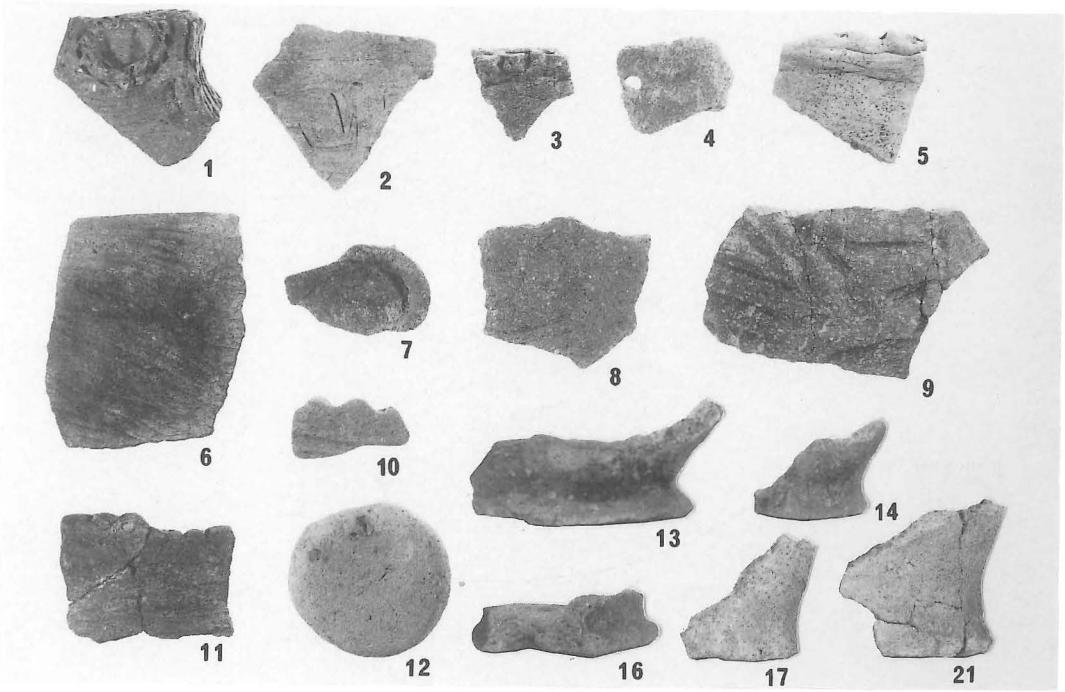
図版 2



出土石器 1 (1/2)

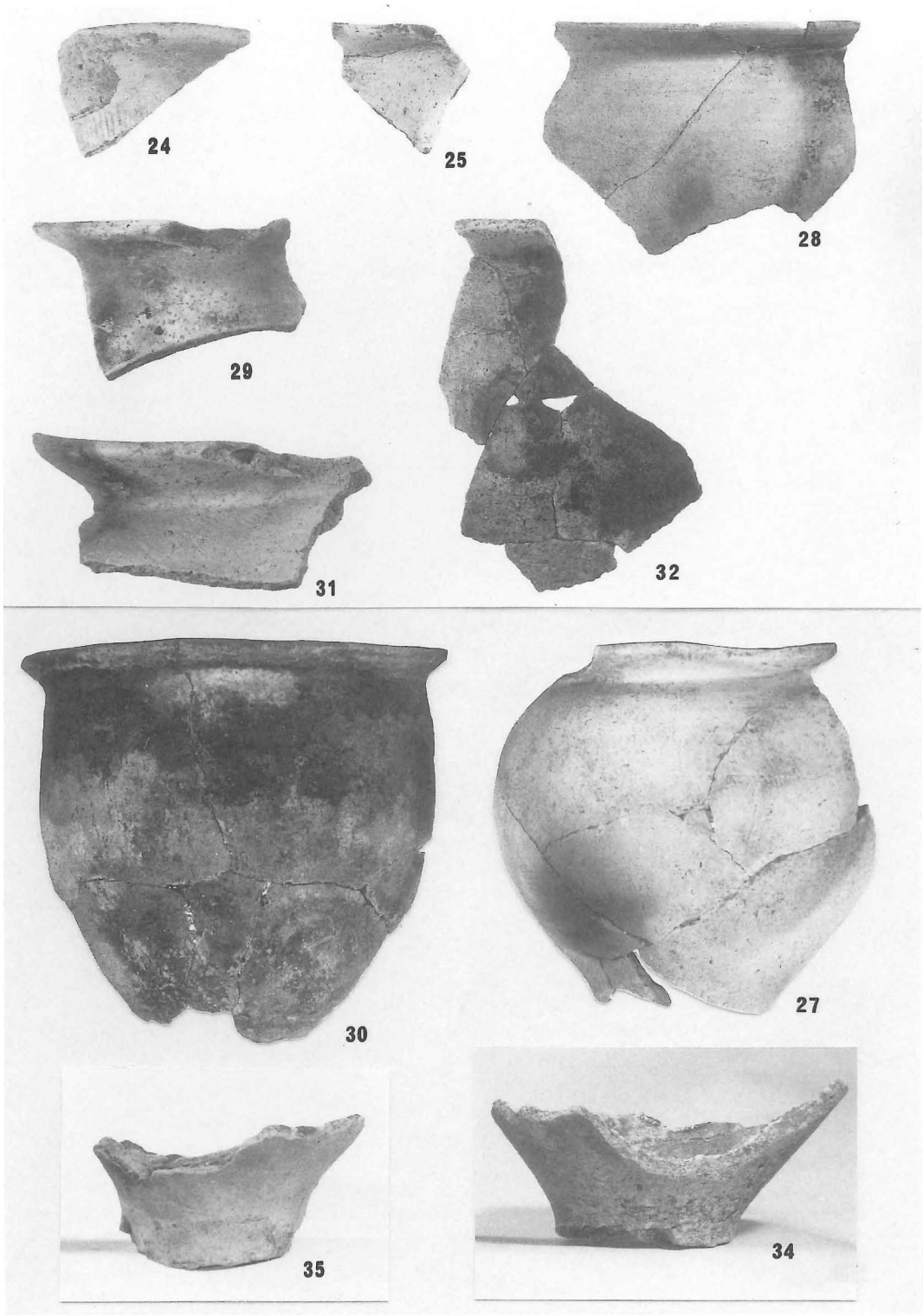


出土石器 2（½）



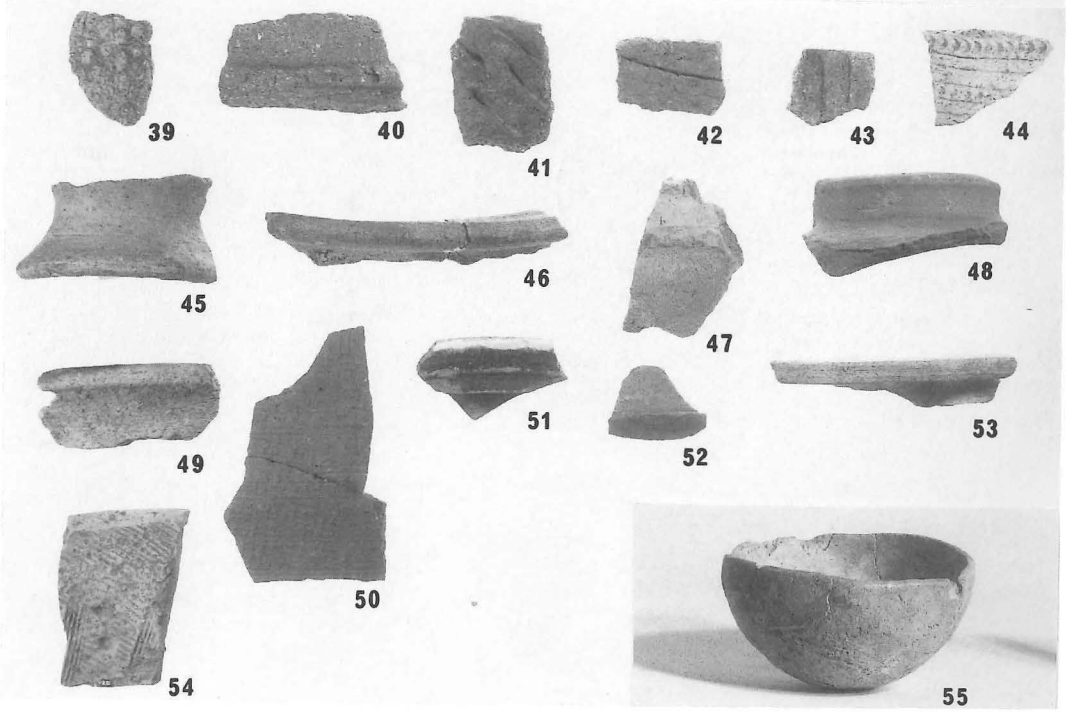
砂遺構出土土器（⅓）

図版 4

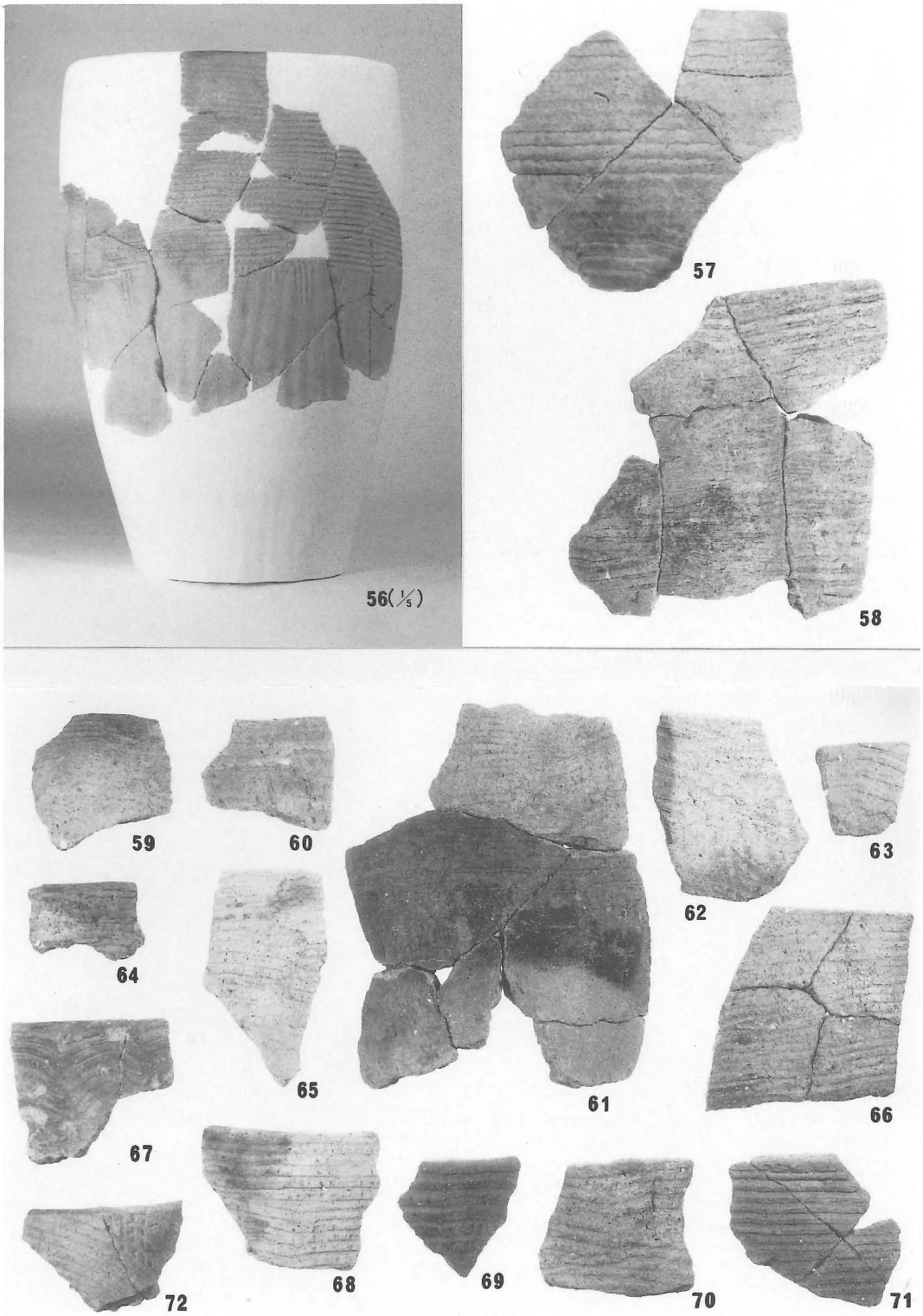


住居址出土土器 1（⅓）

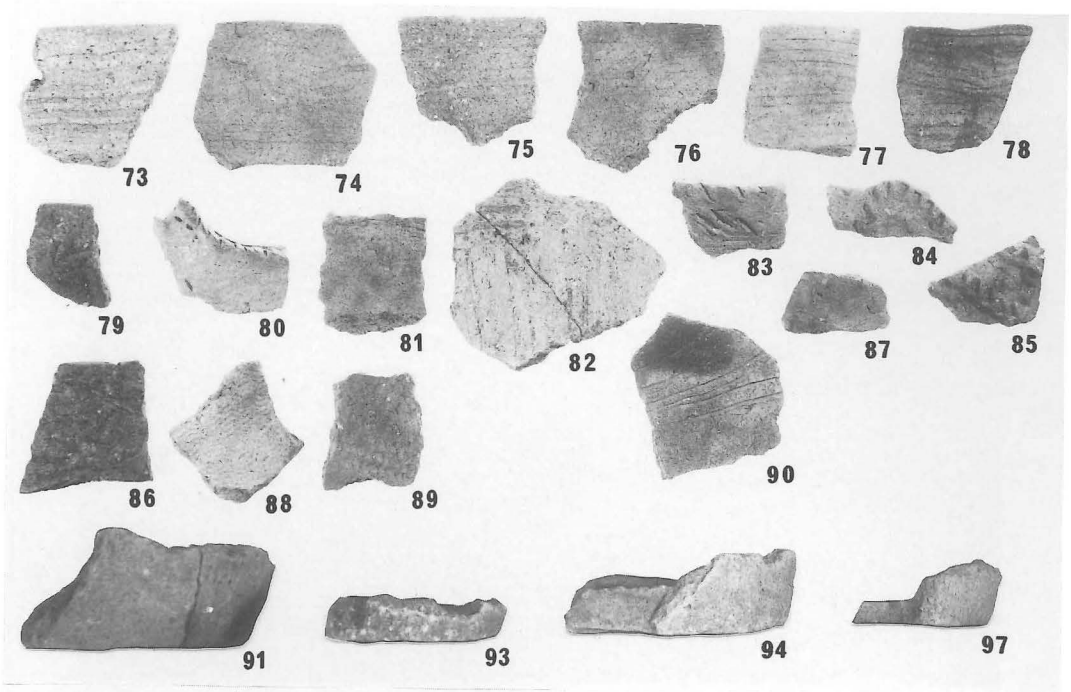
住居址出土土器 2 (⅓)

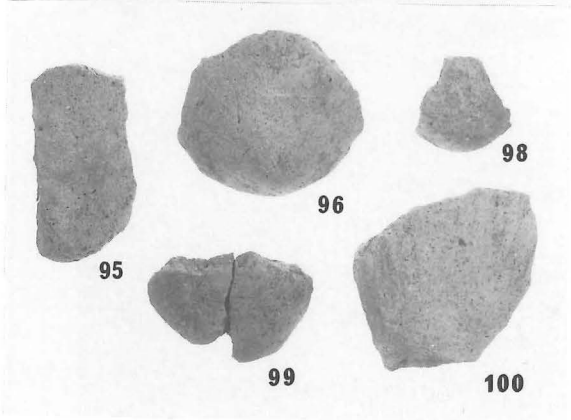


II・III層出土土器(⅓)



Ⅳ層出土土器 1 (1/3)

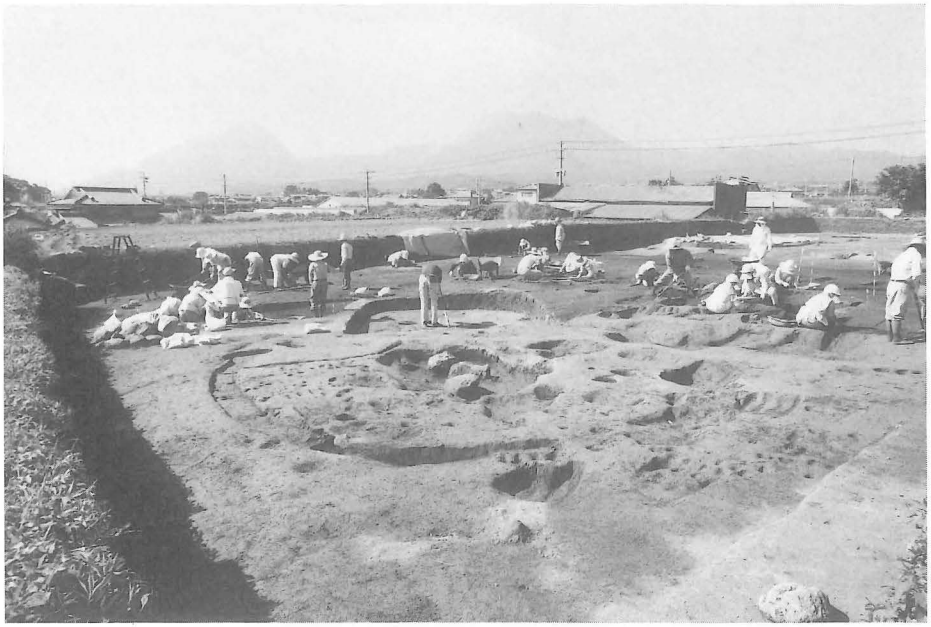

73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
93
94
97


95
96
98
99
100

IV層出土土器 2 (⅓)

図版 8

火砕流発生時



調査風景

有明町文化財調査報告書　第11集

一　野　遺　跡

1992年３月31日

発行　長崎県有明町教育委員会
〒859-14　南高来郡有明町大三東戊1438番地
☎　0957-68-1101

印刷　昭　和　堂　印　刷
〒854　長崎県諫早市長野町1007
☎　0957-22-6000